昭和46年 7 月25日発行通巻20号（毎日曜日発行） 昭和46年 2 月 5 日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日＝ラルース

7/25
220円
20

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目次

世界動物百科　第20号

カラーページ

監修　朝日　稔（武庫川女子大学教授）
翻訳　中原好文（杉野女子大学講師）

私たちの仲間

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

7月21日発売



世界動物百科
21号　8／1

カラーページ　◁イエネコのすべてをこの1冊に▷

□ネコ科ネコ属（つづき）
イエネコ
イエネコの起源と歴史
イエネコの品種
長毛種　ペルシャネコ ヒマラヤン バーマン
短毛種　ヨーロッパネコ　シャルトルー　ロシアンブルー　マンクス　アビシニア　シャムネコ　ハバナネコ　ビルマネコ　ニホンネコ　レックス

カラーを増ページして
かわいいネコちゃんのオンパレード！
あなたのネコを，本誌のなかに見つけてください。

私たちの仲間　〝ネコ特集〟

ネコ社会の〝対人関係〟　ネコの行動学 1　日高敏隆
客間の虎　大佛次郎
顔ふき，ゴロゴロを解読する　わが家のネコ観察記　畑　正憲
漢字のふるさと 16　猫（ねこ）　藤堂明保
三毛ネコの遺伝　カラーページ解説　田島弥太郎
源氏物語と猫　古典動物園 4（最終回）　池田弥三郎
あなたのプシーを健康に　ペット相談室（特集）　増井光子

私たちの仲間

20号……7月25日



ホタルよ，どこへ行ったのか

——濃縮される農薬の被害——

桐谷圭司

辺春川（福岡県八女郡）の支流・松尾川では6月の初旬から中旬にかけて，数少なくなった天然のゲンジボタルが，いまも見られる。ゆるやかな丘陵地帯を流れるこの川には，農薬が流れこむことが比較的少ないらしい　撮影　西村久義

「ほーほー　ほたるこい　あっちの水は苦いぞ……」。これはだれもが幼いときに口ずさんだ歌である。平安時代から詩歌にもうたわれ，ホタルほどわたしたち日本人が心の友として親しんできた虫は少ない。

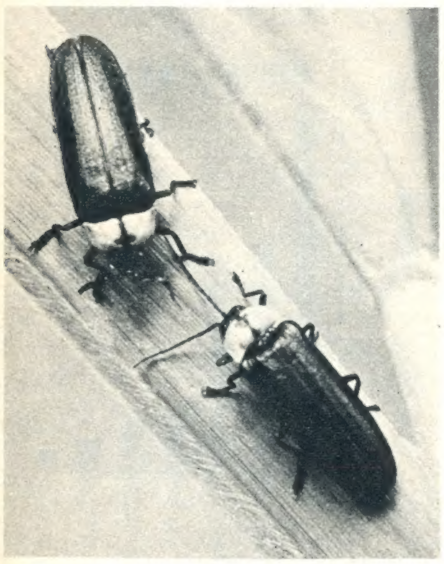
夏の風物詩，ホタルの生態

ホタルは世界で2000種もあるといわれており，その多くは熱帯や亜熱帯にいる。日本には10数種類のホタルがいるが，多くはその分布している地域が限られており，ゲンジボタルやヘイケボタルのように，どこにでもいるわけではない。成虫だけが光るように思っている人も少なくないが，実は卵も幼虫もさなぎ（蛹）も発光する。成虫は夜になるとポッポッと黄緑色の光を発するが，光は雌のほうが強い。南アメリカには幼虫が赤色と緑色の２色を使いわけるものがあるという。また，オバボタルやマドボタルのように幼虫だけが発光し，成虫は光らないか，光っても非常に弱い種類もある。

この光は，求愛のための交信ともいわれているが，まだもの心のついていない幼虫やさなぎも光るのだから，話はそう簡単なものではないかもしれない。

むかしから日本の各地には，ホタルの名所として知られているところが多く，５月下旬から約１か月間ぐらい，初夏の風物詩を飾っている。ゲンジボタルは日本最大の種類で，体長は1.5センチもあり，その光も非常に強い。もっとも中国で晋の車胤が，ホタルの光で本を読み，学業に励んだという故事があるが，あれは中国にいるもっと大きなホタルである。ヘイケボタルは，ゲンジボタルの半分ぐらいの小型の種類で光も弱い。

ホタルの幼虫は水中生活をしていて，ゲンジボタルは山間部の流れの速い渓流に多いのに対して，ヘイケボタルは流れのゆるやかなところや，水田などにもすんでいる。いずれにしても，川幅も数メートル以下の，比較的水深の浅い渓流に発生する。ホタルの幼虫はカワニナ，モノアラガイ，ヒメタニシなどの小型の巻き貝を食べて大きくなる。



ゲンジボタル　　撮影　西村久義

いつごろから減ったのか

近年は夏になるとホタルが少なくなったと世間が騒ぐのが恒例になった感がある。では，いつごろから減少しだしたかというと，あまりはっきりしたことはわかっていない。昨年，多摩動物公園昆虫愛好会が行なった全国的アンケートでも，減りだした時期を指摘した回答は非常に少なかった。返事のあった16の回答の内訳は，昭和20年代が４，30年代が７，40年代としたのが５であり，昭和30年代から多くのところで減少が目だち始めたようだ。高知県では昭和37年ごろから急に減りだしたと当地の昆虫研究家はいっている。

ことしの４月初旬，東京農工大で開かれた応用動物昆虫学会では，ホタルの人工飼育に関する報告が２題もあった。こんな発表はここ10数年来なかったことである。殺虫剤の研究などが大きな比率を占めてきたこの学会にとっては，非常に象徴的なできごとのようにわたしには思われた。そこには，ホタルの自然の繁殖に期待していたのでは，もはや絶滅をまぬがれないという危機意識が，底流として読みとれたからである。

資源保護の大敵は乱獲である。しかし，うちわで取るホタル狩りの程度では影響はほとんどない。ホタルのほうでもこのような減耗を，残った個体の生存率を高めるといった機構で補償できるからである。しかし，業者の組織的乱獲はホタルにも致命的になる。生んだ卵が全部運よく生き残っても，ことしの成虫の数にも及ばなければ，急速にじり貧化してしまう。昨年，大阪の一流ホテルで，客寄せに毎晩数万匹のホタルを産地から取りよせて，ホタル狩りなる大量虐殺を催したことが新聞に報じられていた。ホタルの減少で希少価値がでるにしたがって，業者による乱獲がますますそれに拍車をかけている点は見のがせない。

人工放流はしてみても

最近，東京の奥多摩をはじめ，飼育したホタルの幼虫の人工放流が，全国で10か所近くも行なわれている。所によっては，有志による乱獲防止のパトロールまで組織して保護に当たっているという。むかしから「ホタルの多い年は旱魃の年」と言い伝えられているが，その因果関係は少々あやしいとしても，その発生量が年によってかなりの豊凶があることは，広く経験されている。したがって，たまたまその年の発生量が多くても，それが前年の放流と保護の結果かどうかは，にわかに判断できない。

さて，ホタルをふやしたい一心で，川の収容力以上に多数の幼虫を放流すると，食物の貝類が食いつくされて，もとからいたものまで，食物不足のため共倒れになる可能性もある。どちらのいきすぎも危険なことは，心しておく必要がある。

わたしたちがほんとうにホタルを保護しようと思えば，やはり，ホタルが安心してすめる環境をつくってやることである。ホタルの幼虫だけでなく，食物となる巻き貝の類も放流してやる必要があるかもしれない。せっかく手塩にかけて育てた幼虫も，放した所がすみ場所として適していないと，ドブに捨てているのと同じである。もう一歩突っこんでホタルの減少の原因を考えてみよう。

減っていった原因

ホタルが減った理由の第1にあげられているのは，農薬である。これについては，あとでくわしく検討してみる。次の原因は，河川の改修工事である。川底の砂利採取によって，ホタルの生息場所は荒らされてしまう。また護岸工事で，これまでいろいろな植物が川面をおおうようにおい茂っていたのが，土手がコンクリートに変わって，水面と植物は完全に隔離分断された。ホタルはさなぎになるときは，幼虫が水面上に出てきて土中で蛹化する。ところが，コンクリートの土手では，幼虫が上陸する足場がないのである。これでは，絶滅するよりほかに道がない。このほかにも，宅地造成による水域の減少，工場排水や家庭の下水の河川への流入による汚染，先にあげた業者の乱獲などがあげられる。

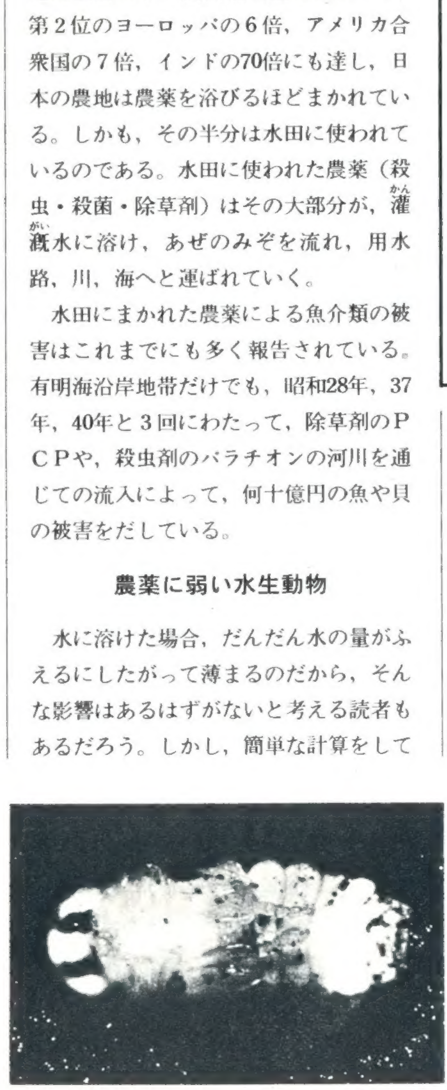
さて農薬が，ホタルの減少にどれほど関係しているかというと，残念ながら確実な証拠はなにもない。しかし，いろいろな状況証拠から類推すると，疑いはますます強まってくる。

ホタルの減少しはじめた昭和30年ごろは，コメの生産量も終戦時の2倍にもなり，それに応じて農薬の消費も急ピッチでふえた時期である。現在，日本の農耕地面積当たりの農薬消費量は世界一で，第2位のヨーロッパの6倍，アメリカ合衆国の7倍，インドの70倍にも達し，日本の農地は農薬を浴びるほどまかれている。しかも，その半分は水田に使われているのである。水田に使われた農薬（殺虫・殺菌・除草剤）はその大部分が，灌漑水に溶け，あぜのみぞを流れ，用水路，川，海へと運ばれていく。

水田にまかれた農薬による魚介類の被害はこれまでにも多く報告されている。有明海沿岸地帯だけでも，昭和28年，37年，40年と3回にわたって，除草剤のPCPや，殺虫剤のパラチオンの河川を通じての流入によって，何十億円の魚や貝の被害をだしている。

農薬に弱い水生動物

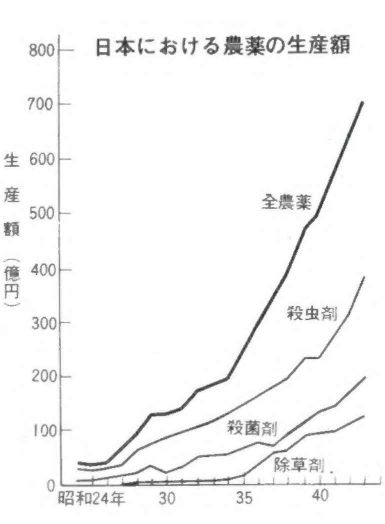
水に溶けた場合，だんだん水の量がふえるにしたがって薄まるのだから，そんな影響はあるはずがないと考える読者もあるだろう。しかし，簡単な計算をしてみると，いま日本で使っている水田害虫用の殺虫剤を，最低の薬量と濃度で水田にまき，そのうちの3分の1が水に流亡するという，実に控えめな計算をしても，水中の殺虫剤の量は1 ppm（100万分の1，1トンの水に1グラムの割合）になる。ところが，ボラはDDTで0.0006 ppm，クルマエビはBHCで0.0004 ppmと，いずれも1 ppmの2000分の1ぐらいの濃度で，48時間以内に半数が死んでしまう。とくに水生動物は，DDTやBHCなどの塩素系殺虫剤には弱い。このため，ホタルの幼虫は，水田にまかれた農薬によって，直接死亡の危険にさらされるばかりでなく，同じ水生動物の巻き貝類が死亡することによって，食物不足による間接的な死亡へと追いやられている可能性も高い。

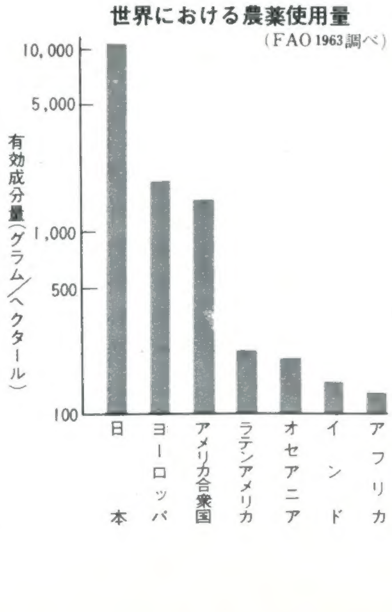


ゲンジボタルの幼虫　撮影　佐々木崑

農薬は水に溶けているといっても，BHCやDDTなどの塩素系農薬は，実は水に溶けにくく，水中では細かい有機質の浮遊物や，底の沈殿物に吸着されて存在しているのである。これらの有機物は，貝類の食物としてその体内に取り入れられる。ところが，これらの塩素系農薬は，油には非常に溶けやすい性質をもっているため，動物の体内ではその脂肪組織にどんどん蓄積されていく。

ところがホタルは，貝類を食物とする





シェリダン行周遊列車

アメリカバイソンの悲劇　4

藤原英司

白人と鉄のウマの暴威は，数限りなく伝えられているが，なかでも1868年にカンザス・パシフィック鉄道が出した〝シェリダン行周遊列車〟の広告は，2つの意味で注目に値する。1つはこの広告から，当時バイソンがいかにたくさんいたかを知ることができることで，もう1つは，毛皮産業のほかに，バイソン狩りが遊びとして，鉄道営業の対象になっていたことである。シカゴ，シンシナチ，セントルイスなどの各駅には，当時次のような広告がはりだされていた。

『鉄道周遊とバッファロー狩りの旅』

シェリダン行周遊列車は，リーブンワースを午前8時に，ローレンスを午前10時に出発します。日程は，出発が1868年10月27日火曜日で，帰りは金曜日。列車は行きも帰りもおもな駅にとまり，平原で壮大なバッファロー狩りを楽しむ時間がじゅうぶんあります。バッファローは鉄道の沿線に無数にいますので，ほとんど毎日，列車から射撃が楽しめます。前回の周遊客は，6時間の狩りで20頭を撃ちとりました。車内には手ごろなお値段で，軽食の用意がしてあります。リーブンワースからの周遊切符は，お1人10ドル。

この列車はローレンスを出たあと，フォート・リレー，アビレーンを通過して，夜8時にエルスワースへ着いた。当時の列車は夜になると，ここから先へは進まなかった。インディアンの襲撃が多かったからである。したがって乗客はすべて，ここで1泊しなければならず，エルスワースのホテルは，たいへんなにぎわいだったという。当時この列車に乗ったルドルフ・ケームが残した記録によると，ホテルでは夕食にバッファローのステーキが出たという。そしてホテルの客は，湿ったパンと，コーヒーの粉をそのまま熱湯に投げこんだような飲物で食事をすませたあと，がたがたの椅子を持ち寄ってホールに集まり，ホテルの主人から勇壮な西部の物語を聞かされた。その話はインディアンの襲撃とか，バッファロー狩りの話などで，結びは「明日みなさんは，そのどちらかを経験できますよ」というわけだった。

その話がうそでない証拠に，列車には銃器室があって，そこに25梃の銃と弾薬がそなえてあった。むろん客も，それぞれ自分の武器を持っていた。

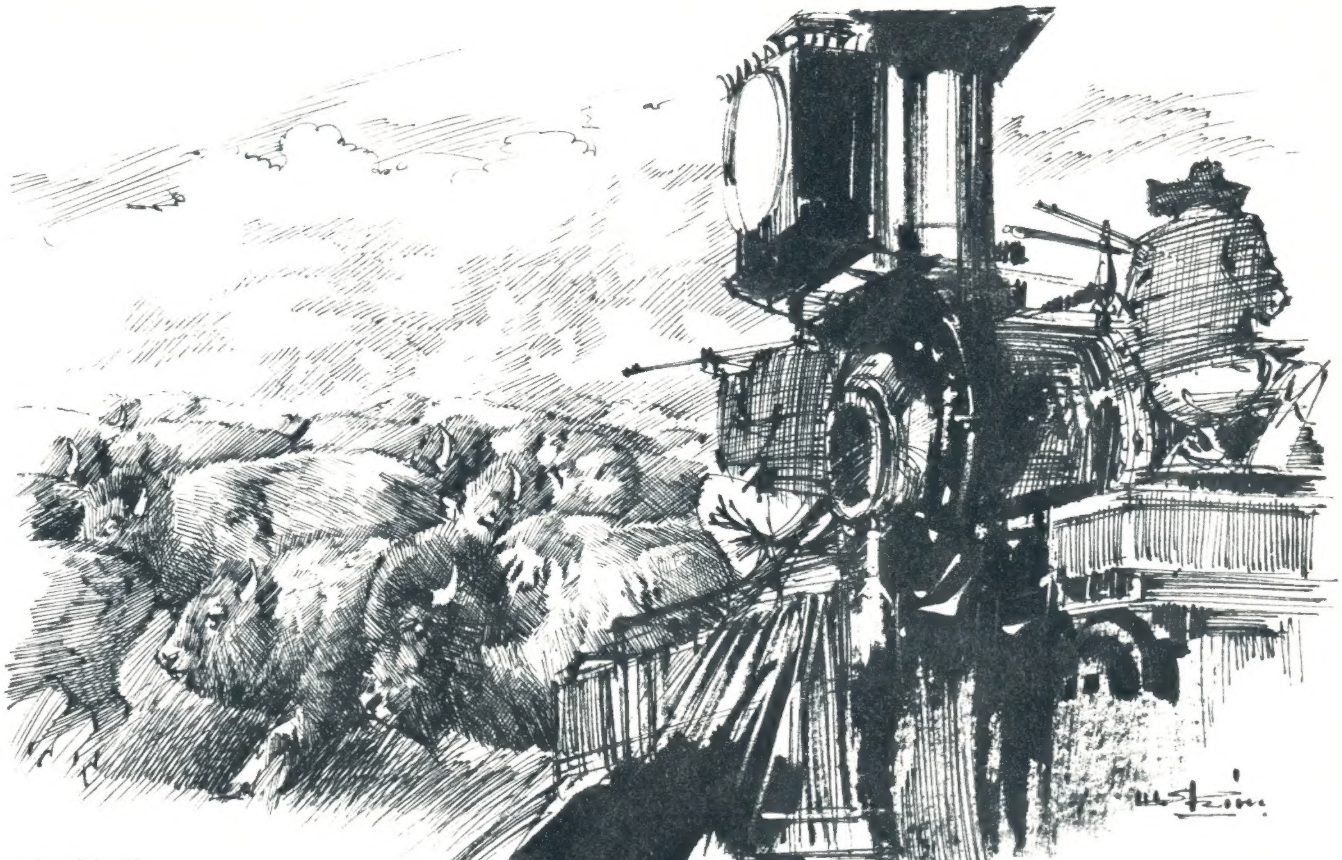
あくる日，走っている列車の前の車両で，突然，銃声が起こった。そして，列車は急にがくんとスピードをおとした。ケームが銃をつかんで窓から首を出してみると，バイソンの群れが少し先を列車と並行して走っており，そのうち何頭かは，もう弾を受けてよろめいていた。列車がとまりきらないうちに，客から乗務員までが，次々と列車からとびおりて，逃げるバイソンを追いかけだした。みんなやたらに撃ちまくり，はてはナイフを引き抜いて，倒れたバイソンの皮を切り裂き，尻の肉を切りとり，舌を抜きとった。かれらは血のしたたる肉の塊を列車に積んで，さらに西へ進んだが，やがてまた，おびただしい大群のなかに突入した。「ヘイズ・シティから30マイル，平原はバッファローでまっ黒く見えた」とケームは書き残している。

反撃するバイソン

だが，バイソンも，しょっちゅう殺されているばかりではなかった。ときには列車に向かって突撃を試み，ありあまるエネルギーと量にまかせて，列車を脱線転覆させることもあった。1871年ごろ，陸軍の将校だったホルダーとデイビスが，サンタ・フェ鉄道でバイソンに襲われたときの模様を，次のように伝えている。

「列車はバッファローの大群に突っこんだ。バッファローは逃げ散ったが，汽笛や鐘の音のため，だんだん気が荒くなるようだった。進むにつれて数は増し，見わたすかぎりの大地が，ことごとく盛りあがり躍動するバッファローの背で埋められた。突然，近くにいた数頭がこちらへ頭をめぐらせ，突っかかってきた。すると他の連中も，そのあとから突撃に移り，さながら黒い雪崩が，列車めがけてくずれかかってくるような感じだった。機関士は列車をとめて汽笛を吹き鳴ら

し，列車のデッキや窓から，いっせいに射撃しはじめた。バッファローの突撃をくいとめるためだった。われわれは，バッファローが激突してきたときにそなえ，客車の中央に立った。大地を震わせながら突撃してきた群れは，列車の下へ次々と頭を突っこんだ。なかには，車両と車両の間へ頭から突っこみ，くさびを打ちこんだようにはさまるものもあった。また，すでに列車の下へ突っこんだものの下へ，また突入するものもあって，ついに車両3つが転覆した。だが，それでもやまず，はては転覆した車両によじ登り，1頭は窓を踏み抜いて動きがとれなくなった……」



え　清水　勝

滅亡史となった開拓史

ユニオン・パシフィック鉄道が完成したのは，1869年5月10日である。この日，はじめてアメリカ大陸を横断する鉄道ができあがり，これによってバイソンは，はっきり南北2群に分けられることになった。むろんはじめのうち，バイソンは鉄道を越えて南北に動くことはあったが，列車からの射撃が一般化するにつれて，しだいに鉄道の周辺へは寄りつかなくなった。

こうして鉄道から遠のいたバイソンを，徹底的に追いつめ，狩りとったのは，幌馬車を従えたバッファロー・ハンターだった。鉄道の敷設によって輸送力が確保されたため，かれらは心おきなく，バイソン狩りに専念した。

皮は1ドル25セントで取引きされ，舌は25セントだった。インディアンの狩りと違って，白人たちはバイソンの皮をはぎとり，舌を抜くと，あとはほとんどの死体をそのまま放置して，腐るにまかせた。つまり，骨や蹄まで，生活の必需品として加工利用したインディアンにくらべると，白人の狩りはおそろしく不経済なものであったといえる。

鉄道が建設された当時，確かに白人たちもバイソンの肉を利用した。鉄道工夫の食料源にしたのである。しかし，鉄道建設が終わってその必要がなくなると，従来から行なわれていた，楽しみのための狩りの獲物として，また毛皮産業の対象として，さらにはインディアン撃滅のための間接手段として，バイソン狩りが続行された。いわば白人のバイソン狩りは，はじめからインディアンが行なった狩りとは，目的や質をまったく異にしていたわけである。こうして，白人たちが1年間に殺したバイソンの数は，驚くべき数字にのぼった。1871年，40〜50万頭。1873年，400万頭。1874年，100万頭……。

大陸横断鉄道が，バイソン滅亡の元凶となったことは否定できないが，バイソンの減少がすべて鉄道建設と毛皮商人のせいかというと，そうではない。白人の西部への伸展そのものが，すべて，バイソンの滅亡に直接かかわりあいをもっていた。つまり，アメリカの開拓史が，そのままバイソンの滅亡史となっていることに注目しなくてはならない。そしてそのなかでも，次の3つの事件は，鉄道建設以前の西部において，バイソンの斜陽化に拍車をかけたものとして，とくに記憶される必要がある。

それは，1846年のメキシコ戦争，1849年のカリフォルニアにおけるゴールド・ラッシュ，そして，1854年の〝ガズデン購入〟である。ガズデン購入とは，アメリカが南方の大陸横断鉄道を建設するために，リオ・グランデ近くの土地を，メキシコから購入したことをいうが，これによって，現在のアメリカの領土が完成するとともに，鉄道建設が進められ，南部のバイソンに，決定的な打撃が与えられることになったのだった。■

ため，農薬も貝によって濃縮されたコンクジュースの形でとりこむことになる。生物の食うもの食われるものの関係を，食物連鎖と専門的には呼んでいるが，食物連鎖を通じての農薬の生物的濃縮は，この連鎖の段階をのぼるにしたがい，たとえば植物より草食動物が，草食動物より肉食動物のほうが，農薬の体内残留量はけた違いに多くなっていく。これがホタルを農薬の慢性中毒にさらす第1の原因である。

呼吸による農薬の濃縮

もう1つ，水生動物が陸生のものと根本的に違う点は，農薬がたんに食物を通じてだけでなく，それ以上に，呼吸を通じて体内に取り入れられることである。水中の酸素は，空気中のわずか75分の1であるから，水生動物は大量の水をえらでろ過して，酸素をとりこむ必要がある。ニジマスの計算では，もし農薬も酸素と同じ効率でろ過すると仮定すれば，体内における1日の濃縮率は700倍，1週間では水中の農薬濃度の5000倍になると予想される。実際には一部が排せつされて，これより少ないが，それでも2500倍くらいにはなる。そのうえ，えらからの吸収率は，水に溶けにくい農薬ほど高いからやっかいである。今まで，実際に自然で調べられたものでは，カキで水中濃度の7万倍，ミシガン湖のサケで100万倍のDDTの濃縮が報告された例もある。もちろんこれには，先に述べた食物と呼吸の両方が関与している。

もう読者のかたがたは，農薬は薄ければだいじょうぶだろうという幻想は捨てられただろう。実は，水系，陸系を問わず，農薬の生物による濃縮率は，環境中の残留濃度が薄いほど高くなるというのが，今では学者の一致した意見である。汚染は薄めればよいという「拡散の原理」は，なんらの科学的根拠がないばかりか，逆にそれだけ汚染の範囲がひろがるだけなのである。

カはふえているのだが

さて水生の同じ昆虫でも，カなどはまったく減っていない。とくに日本脳炎を媒介するコガタアカイエカのような水田で育っているものは，最近かえってその増加が問題になっている。これはカの天敵であるメダカやザリガニが，農薬で少なくなったことにもよる。事実，カを殺す100分の1の濃度で，メダカは死んでしまう。しかも卵から成虫までわずか2週間ぐらいのため，年に何回も発生する。したがって農薬を散布して減らしても，すぐ元に回復する。そのうえ，抵抗性も世代が短いため獲得しやすい。世界で最初にDDTの抵抗性を獲得したのはハエとカであった。一方，呼吸は水面上から直接空気を取り入れて行なうから，ホタルやトンボのように呼吸濃縮の心配もない。これに対して，ホタルやトンボは年1回の発生のうえ，その一生の大部分は水中でえら呼吸と肉食生活をしている。これはもっとも農薬の影響を受けやすい生活様式である。

わたしたちの周囲をよく観察してみると，これまでにあげたホタル・トンボ・ザリガニ・メダカ・タニシ類だけではなく，ドジョウやイモリやカエルなど，多くの水生動物が目だって減っている。水系で進行している大がかりな自然の破壊を，ホタルは身をもってわたしたちに訴えているのである。「急がばまわれ」で，水田の病害虫，雑草の防除の体系を根本的に考えなおすことが，ホタルよ帰れの第一歩であろう。■

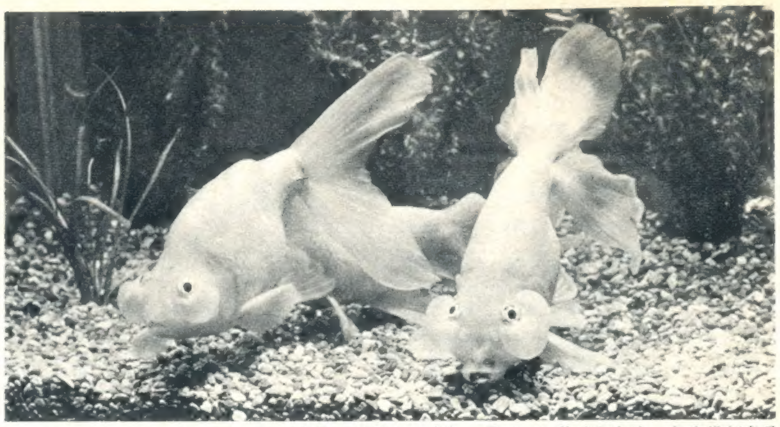
（高知県農林技術研究所主任研究員）

もうひとつの世界

16

グループ・5プラス1

キンギョにとっての温度計



スイホウガン　オレンジがかった美しい赤色。目の下に体液がたまった皮袋がある

キンギョの飼い方の本をひもとくと，水をかえるときには，3°C以上の水温の変化は禁物である，としばしば記されている。たかが3°Cや5°Cの水温の変化にどうして神経質になるのであろうかということは，おそらくだれしもが感ずるところであろう。

事実，氷結したキンギョ鉢（ばち）の中でもキンギョは生きており，氷がとけるとキンギョが泳ぎだすことは，北海道の北のほうの人びとにとっては決して珍しいことではない。また，赤道直下の国々でも，すめないわけではないのに，どうしてわずかな温度変化に気をつけねばならないのであろうか。

2つの温度計

われわれがふつう使っている温度計は，スウェーデンの天文学者セルシウスによってつくられた，セ氏（摂氏，°C）目盛りによっている。しかし，アメリカやイギリスなどでは，ドイツのファーレンハイトによってつくられた，カ氏（華氏，°F）目盛りによっている。

この両者によって別々につくられた温度計の同一目盛りの値は，当然のことながら，その温度計がセ氏によるかカ氏によるかで大いに異なる。アメリカ人やイギリス人が，氷点として感ずる目盛りは32度であるが，32度の目盛りを日本人が見た場合には，どうみても冷たい温度のイメージは生じないのである。

このようにしてみると，同一の数値で示されていても，その基準が違えば，これはまったく比較にならないことはいうまでもない。もう1つの大きな違いは，氷点と沸点との間を，セ氏では100に分けているのに，カ氏では180に分けていることであって，セ氏で10度の違いというのは，カ氏では18度の違いを示すということになる。

これらのことは，同じ人間であっても，国によって温度計の目盛りが異なるというだけで，ときに著しい混乱を起こしてしまうことを示唆している。

このようにしてみると，まして人間とキンギョのようにひどくかけ離れた動物が，同じ目盛りで温度をうんぬんすること自体が，むりなのではなかろうかという疑問が生ずる。

魚がすむことのできる水温は，低いほうの0°C（海水中では－1°C）から，高いほうの38°C（45°Cの温泉中にもいるといわれる）の広い範囲であるが，われわれと本質的に異なるのは，魚の体温は外界の温度に影響され，外界の温度と等しくなってしまう変温動物であることである。つまり，水温を低くすれば，魚体内から体外へ熱カロリーが移って魚体内の温度も低くなり，逆に水温を高めれば，魚の体温も上昇する。また，魚はわずかな刺激にあっても，すぐ体温が上昇する。たとえばキンギョについてみると，不意に現われた人のけはいや点灯によって，体内の温度が0.2°～0.3°C急上昇する。このような外からの刺激による体温急上昇の場合には，元へもどるのに4,5時間もかかるといわれる。このことは，外界水温の変化がこの程度であっても，魚の生理生態に直接影響することを証明している。だから人と違って，魚たちは温度の変化による生理的な負担が著しく大きいので，比熱が最大でもっとも温度の変動のゆるやかな水のなかにすんでいるものと考えられ，天然では温度変化に対してすぐ反応して，適温水域に移動してしまうのである。

ヒトの1°Cは魚の5°C

しかし，キンギョ鉢や庭の池のキンギョたちにはその自由はなく，人間がキンギョに代わって，その措置をしてくれることを期待するしかなすすべはない。

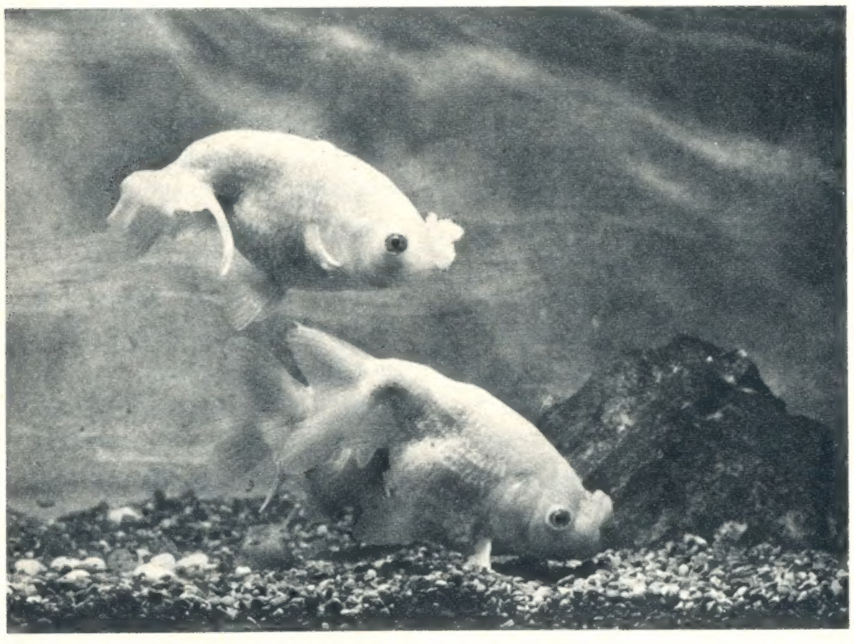
長生きしている，と自慢話にでてくるキンギョたちのすんでいるところをみると，キンギョ鉢であっても，浅い小さな池であっても，直射日光から身を避けることができるような配慮がされている。キンギョの健康のために，日光浴をさせてやればと単純に考えて，よく日のあたる窓ぎわにキンギョ鉢を置いた場合の結果と，これはひどく対照的である。

キンギョが病気になるのは，奇妙に春秋の彼岸のころが多い。このことは，暑さ寒さも彼岸までといわれる気候の変わりめで，日によって，また昼夜によって，温度差が他の時期にくらべてかなり大きいことによるものと考えられ，これらのキンギョたちの病気を予防したり，治療したりするには，直射日光をあてずに，安定した水温下で飼育するだけで，著効を得ることが多い。

実験的にはまだ確かめられていないが，経験的にいって，盛夏，冷房のきいた部屋と戸外との違いのように，人の体調に影響を及ぼすおそれのある温度変化を15°Cぐらいとすれば，魚の場合にはその5分の1の3°Cがこれに相当する。昼夜で気温の激変する砂漠（さばく）のように，人が著しく体調に影響を受ける温度変化を40°Cとすれば，魚の場合にはやはりその4分の1の10°Cぐらいがこれに相当するものと思われる。

このことから魚たちの温度計の目盛りの数値は人の温度計にくらべて，ふつう4,5倍された値がきざまれていると考えれば，キンギョの世界においてはたかが3°Cではなくて15°Cに相当する違いに気をつけねばならないことが理解できるだろう。■　　（H）

ハナブサ　いろいろな色のものがあるが，鼻に花びらのような突起がついている



漢字のふるさと　15



藤堂明保

獅子（しし）　ライオンのことで，昔は師子と書いた。

『後漢書（ごかんじょ）』に「西方の大月氏（カシミール・アフガン地方にいた民族）が師子を献じて，そのかわりに漢の公主（こうしゅ）（王室の娘）の嫁入りを請うた」（紀元88年）とある。これが，中国にライオンがもたらされた最初である。

同じく後漢のことを記した『東観記（とうかんき）』には，「疎勒（そろく）（カシガル）の王が師子を献じた。虎（とら）に似て毛の色は正黄，あごひげが垂（た）れ，尾はふさふさとして斗（ひしゃくの柄）のようだ」（133年）とあって，詳しくライオンの姿を描写している。

師子とは，古ペルシャ語のシャラ（šara）の音訳であり，漢代には師がsiərという発音であったので，「師」という字でそれを音訳し，接尾語の「子」をつけたのである。のちに，動物の名であることを明示するため，「けものへん」をそえて「獅子」と書くようになった。

なお，「師」という字は，人間やものの堆積物（たいせきぶつ）を表わす「𠂤」と「帀」（旗じるし）から成り，人間の集団を意味している。■

ネコ属　*Felis*

ネコ属はネコ科のなかでも，からだの大きさが小型から中型の動物のグループである。体長はいろいろだが，ネコ属にふくまれる種は，形態学的にも習性の点からも，みな非常によく似ている。

次にピューマ，ジャガランディ，オセロット，スナドリネコ，サーバルキャット，ヨーロッパヤマネコ，リビアヤマネコ，オオヤマネコとカラカルについて述べよう。

ピューマ　*Felis concolor*

ピューマは，クーガーまたはアメリカライオンとも呼ばれている。

からだの全長は185センチで，そのうち65センチが尾の長さ，肩までの高さは65センチである。毛は密生し，短く，柔らかで，背中よりわき腹のほうが濃い。体色の基調は，赤みを帯びた美しい淡黄褐色であるが，背中は，ほかの部分よりもくすんだ色をしている。腹部では，赤褐色を帯びた白色にかわる。胸部と脚（あし）の内側では，さらに明るさを増し，のど，口の周囲，耳の内側では，ほとんどまっ白である。目の上下に１つずつある白い斑点が，目の所在をきわだたせている。

このネコ科の動物の分布範囲は，きわめて広い。かつては，西インド諸島をのぞくアメリカ大陸全体にすんでいて，カナダの森林や，アマゾンの密林，パンパス〔アルゼンチン中央部の大草原，日本の２倍の面積〕や，アンデス山脈の高地でも，ピューマを見ることができた。

今日では，狩猟，農耕地域の拡大などによって，事実上北アメリカからは姿を消してしまったが，中央アメリカと，南アメリカのアルゼンチンにいたる地域に，なおかなり生息している。

ピューマの生息地は，もともと多様で，森林にも，丈の高い草が茂る平原にも，川のあたりにも，またもっとも乾燥した地域にもすんでいる。

しかし，どちらかといえば森林地帯のほうが好きらしく，追われると森のなかへ逃げこんでしまう。そのうえ放浪性があるから，子どもの出産，授乳，養育期間を別にすれば，ピューマが一定の場所にとどまっていることはほとんどない。

日中は木の上や，灌木の茂みのなかや，草の上で眠り，夜になって獲物をあさる。その動作は，俊敏で力強く，６メートル以上跳ぶこともできるといわれている。夕方や夜のほうが目がきく。嗅覚（きゅうかく）はあまり発達していないが，聴覚は驚くほど鋭い。

人を襲うことはしない

ピューマは，アグーティ〔齧歯（げっし）類の一種〕，雌のヒツジ，子ジカ，子ウマのような，自分よりも小さいものか，弱い哺乳（ほにゅう）類をえさにしているが，木の上のサルも，ピューマのつめからのがれることはできない。ピューマはサルと同じように，身軽に木から木へとび移り，やすやすと入り組んだ枝のあいだを通りぬけて，鳴き叫ぶサルの群れを追いつめるのだ。

ピューマは家畜の群れに被害を与えるが，雌のヒツジよりも大きい動物を襲うことは，めったにない。犠牲者を捕えると首すじをくだき，のどをかみ切って，むさぼるように血をなめる。泳ぎがとてもうまいが，川を渡るのは，必要にせまられた場合だけである。

雌と雄がいっしょにいるのは，交尾期だけで，ふつうは単独で生活している。





ピューマ。ネコ科。
とても活動的な動物で，一夜のうちに
40キロも歩きまわるとか。木登りや泳ぎがうまく
とくに跳躍力は抜群で，12メートルの幅や
３メートルの高さでも軽く跳べるほどだ。（下）
PH. R. ALLIN

ピューマは，カナダから南アメリカの南端までの
広い地域に分布している。
山や平原，森林と砂漠，そして
熱帯地方や万年雪のおおう地域にもすむ。（上）



ピューマ。見たところ，雌ライオンに似ているから
アメリカライオンとかヤマシシとも呼ばれる。
それでいて，どこかあいきょうがあり
人を襲わない動物だから親しみがもてる。
体長は120センチで，尾は65センチほど。

PH F LINE

約3か月の妊娠（にんしん）期間のあと，雌はふつう2子，多くて3子を生む。子は，目を閉じたまま生まれ，毛並みにはまだらがはいっている。生まれたときの体長は，生後6週間くらいの子ネコとだいたい同じである。5，6週間たつと，子どもどうしで遊べるようになって，毛の斑点がぼやけ始める。そして毛が抜けかわり，10～12週間が過ぎると親と同じ毛並みになる。

ピューマの食欲はたいへんおう盛で，家畜や家禽に与える被害が大きい。そのため，むかしから目のかたきにされて狩られてきた。しかもこの狩りは，ピューマを殺すことだけを目的としたものであって，狩りとしてのスポーツ的な性格などはまったくなかった。というのはピューマは，人間もイヌも追いつくことができないほど早く逃げてしまうので，ピューマ狩りは，スポーツとしてはあまりおもしろくなかったからである。

追いかけられると木に登り，葉の茂みに姿を消してしまうので，森のなかでピューマを追いつめることは，とてもむずかしい。かつて住民たちには，ピューマから家畜を守るための1つの習慣があった。日中は外で草を食べさせた家畜を夜の間とじこめておく柵の杭に，殺したピューマの頭を刺しておくのである。そうしておけばピューマが，仲間の頭が突きささっている柵の中へは決して侵入しないことを，経験上知っていたからである。

ごく幼いうちにつかまえれば，ピューマを飼いならすのは非常にやさしい。イヌやネコとは，仲良く生活するが，家禽類を見ると，襲いたくてたまらないようすをみせる。ネコと同じようにボールを与えておくと，それで何時間も遊んでいる。また家の中で，放し飼いができる。飼い主といっしょにいるのを喜び，かわいがってなでてやると，のどを鳴らす。ある猟師たちは，野生のピューマがよく騒ぎたてていることがあるといっているが，そのうなり声は正確にはわからない。

ピューマの皮は，南アメリカでいろいろなものに使われている。地方によっては，その肉を食べるが，非常においしくて，子ウシの肉に似ているといわれている。

ジャガランディ *Felis jaguarondi*

ジャガランディは，敏捷で軽快に動くアメリカのネコである。長いからだと，長い尾と，非常に短い脚（あし）をしているので，どちらかというとテンに似ている。

頭は小さく，目はまるい。毛並みは短く密生し，くすんだ灰褐色をしている。毛が横にねて，毛の先の黒いところだけがあらわれているときには，暗い感じにみえるが，毛が立って，そのつけ根の青白いところまであらわれているときは，もっと明るい色になる。ふつうは雌の毛並みのほうが，雄のほうより明るい。

ジャガランディは，ピューマよりずっと小さい。体長は55センチから80センチくらいだが，尾の長さは，40センチ以上にもなる。肩までの高さは，約35センチである。

この動物は，メキシコと，パラグアイ，およびアルゼンチン北部にいたる南アメリカの大部分にすんでいる。

ジャガランディは開けた平原にはすんでいなく，灌木の茂みや，木立ちのまばらな森のなかにすんでいる。獲物は，明けがたと日暮れどきにあさる。空模様が怪しいときは，晴れるということがわかるまで待ち，それから隠れ家を出ていく。

鳥類や，ネズミ，アグーティ，ウサギなどのような，下等な哺乳（ほにゅう）類をおもに食べているが，ときには子ジカを殺すようなこともある。

あるナチュラリストは，ジャガランディが子ジカなどよりも，もっと大きな動物に襲いかかり，オオヤマネコと同じように，その動物ののどにかぶりつき，相手を完全に殺すまでは決して放さないほどの勇猛さをもっているといいきっている。

けれどもこの動物がよくねらうのは，ニワトリ小屋である。ジャガランディは，ニワトリやキジには目がなく，家で飼っているものでも，野生のものでも襲う。ジャガランディが人の住んでいる付近によく現われるのはこのためである。

ジャガランディは一定の場所に巣をつくり，



ピューマ。ひっくり返っているのは満腹のため。
強力な前足の一撃で獲物を倒しては
遠くまで引きずっていってから食べる。
日中は，こんなぐあいに茂みのなかや
樹上に隠れて休んでいる。（上）
PH. E. A. HEINIGER



ジャガランディ。ネコ科。
北アメリカ南部から南アメリカの大半に分布。
深い森の茂みにすむ夜行性の動物。
脚が短く，尾が長いところは
ネコ科というよりテンの仲間を思わせる。（下）
PH. VISAGE JACANA



ジャガランディ。頭部は丸くてやや明るい色だが
ほかの部分は，黒または茶色である。
飼われていても，ニワトリが大好きで
がまんができずに襲いかかってしまうほど。
体長は，約65センチである。

PH. A.VISAGE-JACANA

雌雄つがいですんでいる。

妊娠（にんしん）期間は9，10週間で，雌は森の奥深くの，木の枝を敷きつめた地のくぼみか，木のほらの中に2，3匹の子を生む。いったん乳を離れても，子どもたちが自分といっしょに狩りにいけるまで，母親は鳥類や齧歯（げっし）類をとってきて与え，子どもを養う。しかし危険となると，母親は子どもを見捨ててしまうことがある。

この動物は，人間には決して襲いかからないので，これを狩るのに危険はまったくない。ふつうはわなやイヌを使って狩る。ジャガランディは，敵に不意をつかれると，林のなかに隠れたり，川にとびこんで泳いだりして逃げる。

幼いときにつかまえて育てると，すぐ飼いならされて，イエネコと同じようにおとなしくなる。しかし，ときには野生の狂暴さがよみがえることがあるので，自由に歩きまわらせておくのは危険だ。野生にかえると，まっ先にニワトリ小屋に走り，メンドリやアヒルに襲いかかる。

ジャガランディはイエネコと同じように，いつも2本の前肢（ぜんし）で獲物をつかんでかみくだく。たらふく食べてしまうと，自分の脚（あし）をなめ，眠る用意にとりかかる。寒いときには，まりのようにからだを丸め，からだに尾を巻きつける。暑いときには，からだを伸ばし，脚をひろげ，尾を伸ばしている。

オセロット　*Felis pardalis*

オセロットは，アメリカのネコ科のなかで，もっとも大きい動物の1つである。

からだの全長は，150センチに達することがある。そのうち50センチが尾の長さで，肩までの高さは約50センチである。からだ全体の形は，オオヤマネコに似ているが，脚ははるかに短い。からだはきわめてがんじょうで，頭部は大きくないが，引き締まった重い感じである。四肢（しし）はどっしりとしている。目は灰青色で，瞳孔（どうこう）は卵形である。

毛皮は豪華な感じで，短い毛が密生し，柔らかく，絹のようなつやがあり，色どりが美しい。頭頂部と背の中央は金色，両わきは銀色で，腹部をのぞいては，細い線状か，斑点がたがいにつながって線状になった縞模様がある。この斑点は，非常に特徴的で，配列もきわめて多様だから，同じ配列の個体が見つかることは，決してない。この斑点は，雌よりも雄のほうが，はっきりしている。雌には，肩と腰骨のところに，まるい斑点がある。



オセロットの生息する地域は、非常に広い。それにはメキシコから，西インド諸島をのぞく中央アメリカを通り，アルゼンチンの北部にいたる南アメリカの大部分までの地域がふくまれている。

この動物は，高木のはえていない平原には絶対にいない。反対に森のなかでは，ごくふつうにみられるが，それも人の住んでいるところやニワトリ小屋に近いところが多い。きまった隠れ家はもっていないようである。

昼間は，森のなかの薄暗い片すみだとか，木の葉陰だとか，密生した灌木の茂みにひそんで眠っている。早朝か，たそがれ時に獲物をとることもあるが，本来は夜行性の動物である。

野生のものは，鳥類をえさとしていて，木の上や灌木の茂みのなかを捜し求める。アメリカの森に鳥類が少ないのは，この動物が食べてしまうからだという人もいる。子ヤギ，ペッカリー〔ヘソイノシシともいい，イノシシに似た偶蹄（ぐうてい）目の動物〕，サル，アグーティ，ネズミなどの哺乳（はにゅう）類も食べる。

オセロットは，木に登るのがうまい。追われているときには，木から木へ，とび移って逃げる。せっぱつまったとき以外は，水へはとびこまないが，泳ぎもとてもうまい。

雄と雌は，それぞれ別々にえさをあさる。たがいに助けあうこともなく，力を合わせて敵を防ぐこともしない。交尾期は10月から1月。ふつう1産1子である。母親は子を，深い林の木のほら穴に隠す。離乳すると，たくさんの哺乳類や鳥類を与える。

オセロットは，人間に危害を加えることはないし，イヌを見ると逃げる。ニワトリ小屋を襲おうとして，人間の住むところの近くに

オセロット。ネコ科。
そのすばらしい毛皮を，人間からねらわれたため
いまや，絶滅の危機にひんしている。
体長は65～80センチ，尾は50センチぐらい。
木登りの名人で，鳥をねらって捕える。

PH. LEE RUE





現われ、しかけられたわなに、簡単にかかってしまう。

小さいときから飼っていれば、オセロットは、人にも非常によくなれて、子ネコと同じように戯れるが、少し大きくなったものは、なれにくい。しかし、いずれにしても、家畜や家禽を襲うという習性を失うことはまずない。

飼われているとき、昼間はたいていネコのように丸まって眠っている。日の暮れるころになると動き始め、一晩じゅう起きている。小さいときは、《ニャー、ニャー》と鳴いて、空腹やかわき、あるいは退屈していることを教える。しかし、大きくなってからは、この同じ鳴き声が、病気とか、けがを訴える意味を表わすようになる。

オセロットの毛皮は特別珍重され、猛烈な勢いで狩りとられたので、この先、オセロットが、どれだけ生き残れるかは、はなはだ心配である。

スナドリネコ *Felis viverrina*

スナドリネコは、アジアにすむいろいろな野生のネコ〔注1〕のなかで、からだの構造の点から見てイエネコに近い動物である。

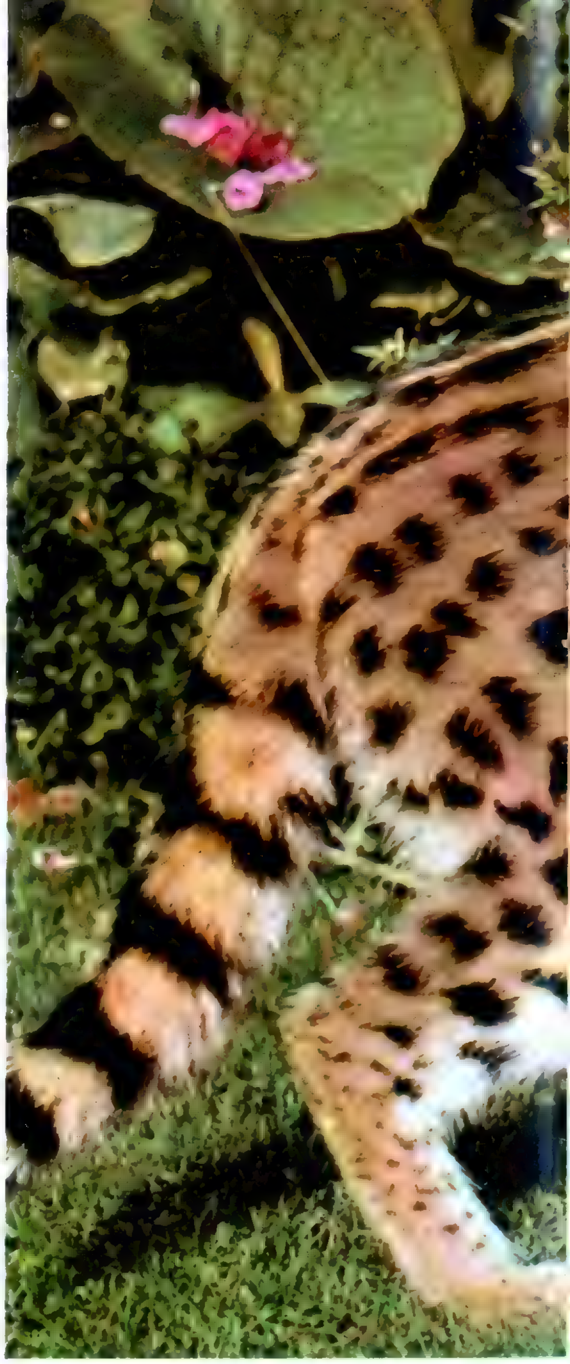
肩までの高さは35～40センチ、からだ全体の長さはやっと100センチで、そのうち30センチが尾の長さである。重さは約8キロ。

ネコ科のあらゆる動物のなかでも、おそらくいちばん毛皮のみすぼらしいネコである。毛はかたくてつやがなく、短い。毛色の基調は、黄みを帯びた灰色であるが、腹部のほうは、もっと明るい色をしている。

からだじゅうに、黒っぽい斑点があり、額の部分では、それが何本かの縞になっている。この縞は部分的にとぎれたり、たがいに密着した斑点のつづき模様になったりして、背中のほうまで延びている。脚（あし）には横縞がある。

尾は、8つか9つのまるい輪のような縞で飾られている。瞳孔（どうこう）はまるく、他のネコ属のように、アーモンドのような形にはなっていない〔注2〕。虹彩（こうさい）は、ブロンズ色をしている。

スナドリネコの分布地域は、インド、セイロン、ネパール、インドシナ半島、スマトラ、ジャワにひろがっている。とくに湿気の多い森のなかや、川口に近いあたりの川岸に沿って生息している。他のネコ科の動物と違って、魚をおもなえさとしているので、沼沢地がとくに好きである。しかし哺乳（ほにゅう）類や鳥類を捕えて食べることもある。



からだはそれほど大きくないのに、とても攻撃的で、自分の体長以上の動物でも平気で攻撃し、人間にさえも襲いかかるといわれている。

スナドリネコは、飼育しても、いつまでも野性を失わず、人間にはなじまない。

サーバルキャット *Felis serval*

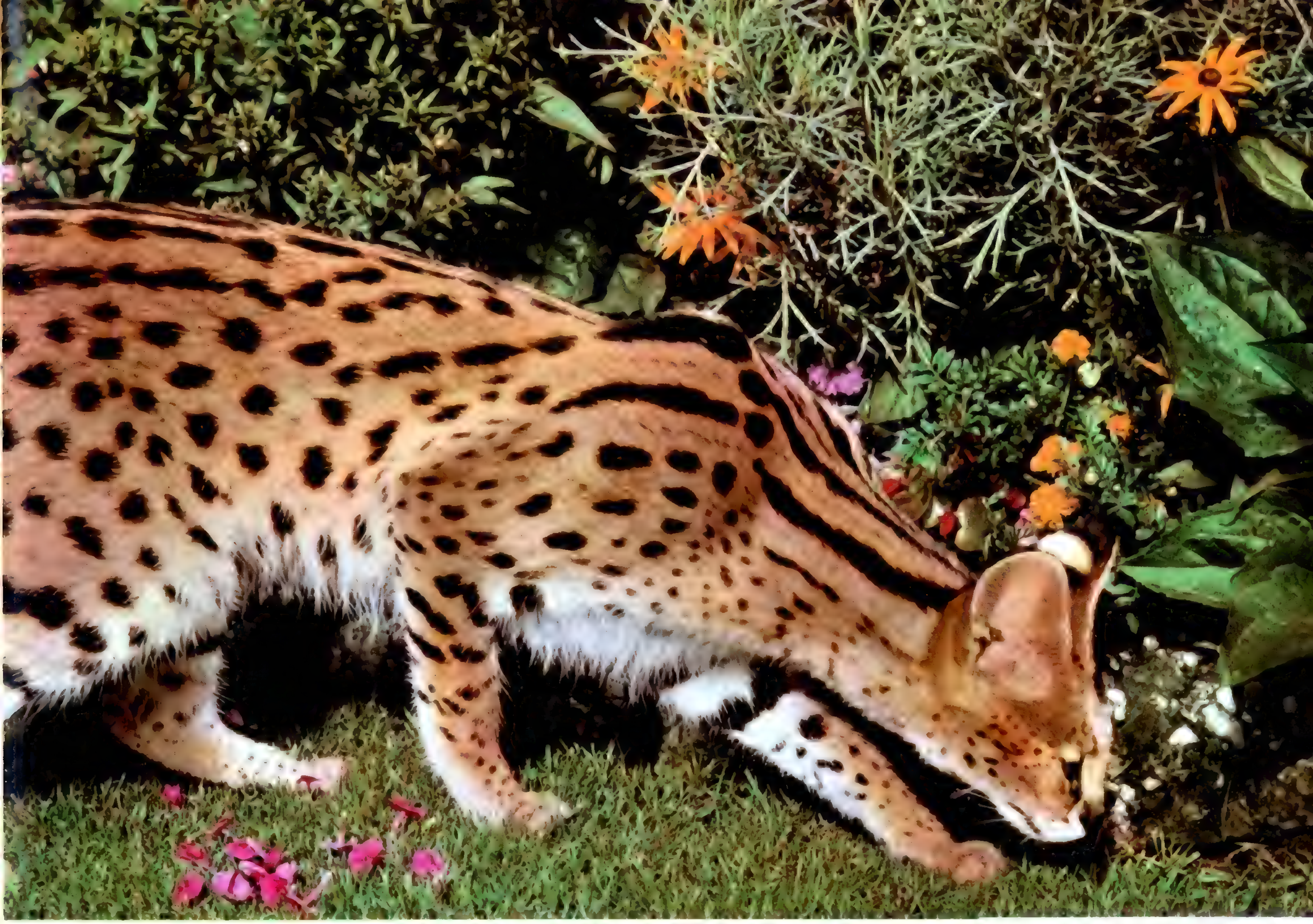
サーバルキャットは、比較的体長の大きなアフリカの野生ネコで、先に述べた南アメリカのオセロットに似ている。

からだはほっそりしていて、頭は左右から押しつぶしたように扁平で長く、耳は大きくまるみがあり、毛はどちらかというと長いほうである。からだの全長は135センチから150センチで、そのうち尾の長さは35センチである。肩までの高さは50センチに達する。

毛は短く、密生し、柔らかくてつやがある。毛の色は、背中では赤もしくは黄みを帯びていて、腹部では白い。輪郭の非常にはっきり

オセロット[illegible]学名のpardalisとは「ヒョウに似た」という意味だ。事実、この動物の体毛は実にみごとである。短毛が密生して、卵形のまだらの配置が美しい。目がひとなつこく、外国ではペットにされる。
PH. PRENZEL PRIS

スナドリネコ　川岸にすみ、好物の魚を前足ですくって食べる。また鳥や小さな哺乳類もえさとしている。人に飼われても、このとおり歯をむきだし、耳を倒して威嚇して、心を許さない動物だ。
PH. R. FLEMMER



した黒い斑点が，規則正しい線を描いて，背中に並んでいる。斑点の並び方は，横腹と首と脚(あし)では不規則になっている。尾には黒い輪のような縞がある。耳のつけ根も黒い。

サーバルキャットは，南アフリカだけでなく，アルジェリアにいたるアフリカ西部と，アフリカ東部にもいる。灌木が密生する2000メートルぐらいの山地に多くが生息しているが，岩の多い地域にもいる。自然にできた岩の割れめやほら穴が，つごうのよい隠れ家を提供するからである。

ウサギ，レイヨウの子，子ヒツジその他の哺乳（ほにゅう）類も襲うが，とくに鳥類をえさとしていて，2メートルくらいも高く跳びあがって，飛んでいる鳥を捕える。このように，サーバルキャットは，鳥が好きなので，夜にはよくニワトリ小屋に忍びこみ，1羽残らず食い荒らしてしまうことがある。

昼間は，安全な隠れ家に眠っている。獲物を捜し始めるのは，日の暮れ方である。かれらは，いつも物陰にひそんで待ち伏せるから，獲物を襲うときの姿は，なかなか見られない。この動物を捕えるには，ふつうわなを使う。

アフリカ東部では，サーバルキャットの肉はきわめて上等の料理として珍重されている。こうして，サーバルキャットは，ずっと以前から狩猟の対象にされてきたので，現在ではソマリアとエリトリア以外では，たいへん数が少なくなってきている。

小さいうちにつかまえてかわいがってやれば，すぐ飼いならせるが，大きくなってからつかまえたのでは，気の短いその性質が，いつまでたってもなおらない。

サーバルキャットは，飼いならされると，優美な大きなネコに変わって，ほかの動物たちや人間とも遊ぶし，自分ひとりだけでも，楽しそうに遊んでいる。イエネコの食べるものならなんでも食べるが，とくに牛乳が好きである。

サーバルキャットの皮で，高価な毛皮製品がつくられ，その場合は《ケープタウンネコ》という呼び名で呼ばれている。

サーバルキャット・ネコ科
体長は100～115センチ，尾長は35センチ
肩高は50センチである。
大きな野生ネコで，おもにアフリカにすんでいる。
頭が小さく，四肢が長いのが特徴。
PH. PRENZEL-PRESS



サーバルキャットの子ども。
鳥が好きな動物で，跳躍力にすぐれ
木登りもじょうずである。
生後まもなく，木登りや鳥をとる方法を覚える。
飼われると，なれ親しんで，いうことをよく聞く。
PH. ZUBER-RAPHO



ヨーロッパヤマネコ。ネコ科。
ヨーロッパの森にすむ夜行性の動物。
イエネコによく似ているが，別の種である。
体長は70～100センチで
尾は全体的に太く，35センチほど。

PH. A. FATRAS

ヨーロッパヤマネコ

Felis sylvestris

ヨーロッパヤマネコは，ほとんど森のなかにすんでいる，野生のネコである。この野生のネコとイエネコとは，いくつかの点で共通しているので，長い間イエネコの直系の先祖であると思われてきた。しかし今日では，その考えは否定されている。

大きいヨーロッパヤマネコは，ちょうどキツネと同じぐらいの大きさで，イエネコよりはるかに大きく，がんじょうである。体毛はイエネコより密生し，ひげの数も多く，歯もじょうぶである。さらに，頭はより大きく，尾は短いが太い。尾には，黒い輪になった縞模様がある。イエネコの尾は先が細くなっているが，このネコの尾は，先へいってもつけ根と同じくらい太く，切断されているようにみえる。

体重は5，6キロである。全長は，尾をふくめて100センチから120センチまでさまざまで，なかには135センチに達するものもいる。尾の長さは，30～35センチで，肩までの高さは35～40センチである。

毛は中くらいの長さで，雌の場合はときとして黄みを帯びた灰色であるが，ふつうは，雌雄とも淡い黄褐色を帯びた灰色で，暗い色の縞が横に並んでいる。のどには，黄色がかった白い斑点がある。鼻づらにはえている毛はオレンジ色で，鼻鏡〔注3〕はバラ色をしている。

額から4本の黒い線が出て，両耳の間を通っている。そのうちまん中の2本の縞が，背中までのび，そこから1本の中心線になって，尾のつけ根までのびている。この中心線からわき腹にかけて数本の横縞が出ている。この横縞は不規則で背中の縦縞よりは黒っぽく，腹部までつながっている。

黄色みがかった腹部には，黒い斑点があり，脚（あし）にも，同じような縞がある。足のうらは，暗褐色である。左右の耳は非常に離れていて，横にねている。耳の外側は錆びたような灰色で，内側はよごれたような白色をしている。

ヨーロッパヤマネコは，今でも，北極地方をのぞくヨーロッパのほとんどの国々にすんでいる。生息地はウクライナ，コーカサス，小アジアにまでひろがっている。

すみかは，安全で石の多い山のなかにある。また木のほらに隠れることもあるが，寒いときには，他の動物が土に掘った穴を占領することもある。



ピューマ。ネコ科。子どもたちは，生後３か月になるとまだらが消えて，親と同じ黄褐色の毛並みになる。そして，親について歩きまわり，狩りの方法を教わる。ピューマの子どもたちが，木や岩陰にひそんで獲物を襲うようになるのも，そう遠い日ではあるまい。ふつうは単独で生活しており，シカ，ヒツジ，サル，鳥などを食べている。すばしこくって，頭がよく，飼われるとなついてかわいいという。

PH. E-A. HEINIGER







カラカル。ネコ科。捕えたウサギを食べる段になって，近づいたカメラマンに気づき振りむいた。しかし，うさんくさそうなその顔に恐れのけはいはないようだ。体長は65〜75センチ，尾の長さは25センチほどの美しい動物である。アフリカ，南アジア，中央アジアの草原と砂漠にすむ。

PH. DES BARTLETT-A. DENIS PRODUCTION

ヨーロッパヤマネコは，非常に孤独な動物で，２匹を同時に見ることは，まずないといってよい。雄と雌がいっしょにすむのは，交尾期だけである。かれらは，１つの巣に長くすむことは決してなく絶えずさまよって，ときには，とてつもなく遠くまで移動することがある。

かれらが獲物をあさるのは，たそがれ時である。きわめて発達した感覚に恵まれ，疲れを知らぬ忍耐力で獲物をねらう。中・小型の動物にとって，ヤマネコは，きわめて危険な存在である。

あらゆるネコと同じように，巣の中の鳥類をねらい，木の上のリスを襲い，穴の入り口でウサギを待ち伏せる。もっと大きな動物を襲うときには，後ろからとびかかって，のどをかみ切る。湖や川の岸で，水鳥や魚をあさることもあるが，その捕え方は，たいへんじょうずである。飼育場，とくにキジの飼育場に大きな被害を与える。

森のなかの村の，ニワトリ小屋やハト小屋も襲うが，一方，農業に害を与えるネズミをたくさん食い殺すので，このネコは有益であるとみられている。

野ネコとヤマネコは別の動物

このヤマネコの交尾期は２月である。妊娠（にんしん）期間は９週間，４月に子を生む。ときにはイエネコと交尾するが，これら２種の動物が仲良く生活するのかどうか，まだ確かめられてはいない。しかし，これらの動物のあいだから生まれた雑種はたくさん見つかっている。〔注４〕

雌は子を生む前に，岩の割れめや木のほらの中に巣を選ぶ。子は５，６匹で，目のあかないまま生まれる。哺乳（ほにゅう）期が終わると，母親はネズミやモグラや小鳥を与える。子どもは，非常に早い時期から，木に登れる。木の枝が，かれらの遊び場になり，同時にいちばん安全な隠れ家となる。危険を感じると，このヤマネコは，太い木の枝の陰に，巧みに身を隠す。

襲われると，勇敢にも何匹ものイヌに立ちむかうこともある。しかし，もし逃げ場さえあればそちらの道を選ぶ。また，母親は，自分の身が危険になると子どもを見捨てて逃げることもある。

ヨーロッパヤマネコを小さいうちにつかまえても，飼いならすのは，なかなかむずかしい。というのはこのヤマネコは，自分でつかまえた獲物しか食べないので，できあいのえさを食べさせることはできないし，新しい環境にならすことが困難なのである。イエネコ

ピューマ，しとめた大きなシカを
子どもたちが食べる。こんなとき
親は子どもが食べている間見張りをしており
安全だとわかると自分も参加する。
雌はふつう，１度に２，３子を生む。（**20**－10，11）
PH. D. ROBINSON PHOTO RESEARCHERS



ヨーロッパヤマネコ。
日が落ちて，暗やみが森を支配するとき
このヤマネコは活動を始める。
単独で生活し，巣に休む鳥，木に遊ぶリス
穴から出てくるウサギなどを獲物にする。（上）
PH. A. VISAGE JACANA



ヨーロッパヤマネコ。上の写真とは違う個体だが
光の量による，目の瞳孔の変化にご注意。
瞳孔は光が強ければ細くなり，弱いとひろかる
"ネコの目のように変わる" ということばは
ネコ族にとっては不本意なことに違いない。（下）
PH. A. FATRAS

の子のように戯れていても、人間が姿を見せれば、すぐにおびえて、三角の耳を倒して緊張する。そのときの表情は、獰猛というほどではないが、敵意を帯びたものとなり、いまにも攻撃するかのような声で、うなりだす。その黄緑の目は輝き、毛をさか立て、つめを立てて、ひっかこうとするような姿勢をとり、少しも人間に心を許さない。

飼われていたとしても、ネズミと小鳥をねらうことは、変わらない。この動物が動物園でもめったに見られないということが、その飼育のむずかしさを示しているといってよいだろう。

人間はむかしからヨーロッパヤマネコを、狩猟の対象としてきた。この動物をおびき寄せるには、ネズミか鳥の鳴き声をまねるだけでよい。狩人は、ふつうそれを巣に追いつめるのだが、ときには猟犬を使って木の上へ追いあげ撃ち殺してしまう。むずかしいのは、これを生きたままつかまえることである。そのためには、2、3人の勇ましい狩人たちが、手と腕にはうたいのように布を巻きつけて身を守り、ヤマネコをうまく袋の中に閉じこめるのだ。

ここでいうヤマネコを、イエネコが野生化したいわゆる野ネコと、混同してはならない。大きい野ネコでも、ほんとうのヤマネコより小さい。野ネコは尾が先細りになっていることからも、また足うらが暗い色を示していることからも見分けがつく〔日本では、対馬と沖縄の西表島以外には、ほんとうのヤマネコはいない。他の地方で、山奥でヤマネコを見たとか、ヤマネコを捕えたという話がときどき伝えられるが、それはすべて野ネコ、つまりイエネコが野生化したもので、ほんとうのヤマネコではない〕



リビアヤマネコ。ネコ科。
アフリカ全土、アラビア、インドに広く分布する。
頭もからだつきも、ふつうのイエネコそっくり。
学者たちは、この動物が
イエネコの祖先であろうと考えている。
PH. OKAPIA

リビアヤマネコ　*Felis lybica*

リビアヤマネコを、ほとんどの学者たちがイエネコの祖先とみなしている。リビアヤマネコは、アフリカ全土にわたって広く分布しているほか、インド、アラビア、サルジニア島、コルシカ島、マジョリカ島にもすんでいる。

体長はほぼ50センチ、尾の長さは25センチである。その大きさと毛並みの模様は、イエネコにそっくりである。多少の違いがあっても、からだ全体は一様な黄褐色である。しかしときとして、からだの背面部で灰色を帯びた淡い黄褐色のものを見かけることがある。頭の上と、背に沿った部分では、赤みを帯び、両わきでは明るさを増し、腹ではほとんど白くなる。

毛皮にはたがいに密着した黒い小さな斑点からできた横縞がある。尾はつけ根のところでは黄色く、うら側では白くて、黒い毛でできた3、4本の幅の広い輪で、飾られている。尾の先は黒い。

オオヤマネコ属　*Lynx*

オオヤマネコ属は、ネコ科では中くらいの大きさで、その特徴は、次のとおりである。耳は大きく、とがって、その先端は筆のような毛のふさで飾られ、からだはがんじょうで、脚（あし）が長く、尾は短い。

オオヤマネコは、とくに人間の近づきにくい森に生息している。ステップや砂漠、ときには、人の住んでいる近くにもみられる。ヒョウと同じ殺し屋で、鳥獣や家畜にとっては、つねに恐ろしい存在である。しかし、その習性とえさのあさり方は、ほかのネコ科の動物とは違っている。

オオヤマネコ　*Lynx lynx*

ふつうのオオヤマネコは、ほとんどヒョウと同じくらいたくましい。しかしヒョウよりややからだが小さく、脚は長い。体長は100センチから130センチの間である。尾の長さは10〜20センチ、肩までの高さは、65センチに達することもある。体重は、成獣で30〜45キロである。

この動物は、非常にがんじょうなからだのつくりをしている。力強い脚は、トラの脚に似ていて、驚くような力に恵まれていることを想像させる。長くとがった耳をもち、その先端には黒くてかたく密生した、長さ4セン



すくらいの、小さな毛のふさがついている。

毛並みは豊かで、柔らかい。顔の毛は長く伸びて、両方のほおに1対のとがったほおひげとなっている。そしてそれが耳のふさとともに、この動物の独特な顔だちをつくっている。

毛皮の地色は、赤褐色がかった灰色であるが、その上にややこしい茶褐色の斑点がある。脚（あし）の内側、首の前のほう、くちびるや目のまわりは白い。短い尾には毛が密生し、つけ根の部分には、あまりはっきりとはしないが、暗い色の輪が幾すじかある。尾の先は黒い。

ふつう、夏と冬では毛の色と毛並みの模様が変わる。夏は毛が短く、毛の色は赤褐色である。冬に毛が長くなり、灰色を帯びた白色に変わるのである。雌では、体毛の基本的な色合いが、雄よりも濃く、斑点は、それほどはっきりしてはいない。子の体毛は、よごれたような白色をしている。目はブロンズ色で、瞳孔（どうこう）はまるい。

オオヤマネコは、古い時代から知られているが、ローマ人たちはライオンやヒョウのようにこの動物を闘技場へ引きだして、見せ物にはしなかった。というのは、これを生きたまま運んでくるのが、とてもむずかしかったからである。

野生での生活状態は、まだほんとうにはわかっていない。そのことが、この動物について、このうえもなく空想的な、いろいろな迷信を生んだのである。

古代の人たちは、この動物が、ほかのどん

オオヤマネコ[illegible]は、北方にすむ動物で、ユーラシアと北アメリカの北部に分布している。体長は100～130センチ、尾は短く10～20センチ。耳の上と両ほおとにはえている、とがったふさ毛が特徴である。

PH. P.W. DYRE–NHP AGENCY



ボブキャット*Lynx rufus*。オオヤマネコ属の一種。
カナダからメキシコ一帯に分布して，草原や森林
半砂漠地帯にすみ，木登りがうまい。
体長は70センチ前後。尾は10～20センチ。
ネズミやウサギを捕えて食べる。
PHIL SIRMAN

な動物よりも鋭い視力をそなえているので，いかにかたい，またどんなに不透明な障害物でも，透視できると信じていた。

中世になっても，オオヤマネコはドイツのどこの森のなかでも，ごくふつうに見られた。そして，あらゆる猛獣のなかで，もっとも危険なものと考えられて，すさまじく迫害されたので，事実上ドイツから，姿を消してしまったくらいである。

オオヤマネコの分布範囲は，現在でもまだかなり広く，ヨーロッパ，アジアおよび北アメリカのかなりの部分を占めている。オオヤマネコは，さらにいくつかの亜種に分けられるが，専門家のなかには，それを全部別の種とみる人もある。

自分の足跡を踏んでもどる

オオヤマネコは，木ややぶの多い地域にすんでいる。そこには，獲物になる鳥やけものがたくさんすんでいて，しかも人間がたやすくはいりこめないからである。1年じゅう，放浪の生活を送るオオカミとは違って，同じ1つの地域に長い間定住し，その地域を縦横に歩きまわっている。夜になると遠征して，交通量の多い道を平気で横切り，村へはいりこんで，家畜を襲う。

多くのネコ科の動物と同じように，オオヤマネコも単独生活をしている。知能やずるさや肉体上の特質も，ほかのネコ科の動物と同じようにすぐれている。この動物は力強い筋肉と鋭敏な感覚をもっているから，いつも慎重に，驚くほど軽々と動きまわる。必要ならば，すばらしい跳躍もする。また木登りもうまく，非常に広い川を泳ぎ渡ることもできる。

一般にいわれるのとは異なって，いちばん発達している感覚は聴覚であり，視覚ではない。嗅覚（きゅうかく）は，ネコ科のほとんどの動物と同じようにかなり鈍い。イエネコの場合と同じく，ひげは感覚毛，つまり触覚器官としてかなりたいせつな役割を果たしているようである。

オオヤマネコの鳴き声を説明するのはむずかしい。力強くて鋭く，ネコの夜鳴きにも似ている。たとえてみれば，キツネの鳴くときのような声を長くのばし，それがだんだん小さくなって，ついにはクマのうなり声のように低く太い声になるといったところだろう。

ふつうオオヤマネコが鳴くのは，からだに変調をきたしたときか，腹の減ったときである。おこったときや身を守る姿勢のときには，ネコと同じように背を丸くして〝ふうっ〟と息を吹きかける。満足したときにも，ネコと同じようにのどを鳴らす。



オオヤマネコは，夜行性である。夜明けの光がかすかにさし始めると姿を隠し，昼の間は巣の中にいて，夜にならないと，出てこない。生来の用心深い性質から，針葉樹林を好む。その針のような落ち葉でおおわれた地面には，自分の足跡がつかないことを知っているからである。巣は岩のくぼみだとか，森のなかでも，いちばんよく茂ったやぶを選んでつくる。この動物は，半ば眠ったような状態のときでも，鋭い聴覚のおかげで，自分のまわりで何が起こっているかを察知できる。

オオヤマネコの足跡は，ほかのどんな動物とも混同されることはない。それはオオカミの足跡よりも大きく，まんまるで，前の部分が欠け落ちたような形をしていて，つめの跡がなく，真珠の首飾りのような格好をしている〔注5〕。獲物を求めて遠くまでいくとき，オオヤマネコは自分自身の足跡を踏んで引き返すという奇妙な習性をもっている。集団で獲物を追いかけるときでも，同じように行動する。〔注6〕

猟師のあいだに，こんな話がある。はじめてオオヤマネコの足跡を見つけた新前の猟師が，二すじしか足跡がついていなかったので，オオヤマネコは2頭しかいないだろうと思った。ところが少し先にいくと，この二すじの足跡は1本になっていた。もうすこしたどって





カナダオオヤマネコ *Lynx lynx canadensis*
別名"極地オオヤマネコ"と呼ばれている。ほおの豊かなふさ毛が、この動物をライオンのミニチュアのように見せている。毛皮は厚く柔らかで、大いに珍重されている（上）
PH. MUNDIORO

オオヤマネコの子ども
子どものときは、このように斑点におおわれたような白い色をしているが、成獣になると赤褐色になる。冬になると、毛が長めになって色も子どものときの灰色に近い色に変わる（下）
PH. [illegible]

いくと、オオヤマネコたちが子ジカを襲った跡のあるあき地に出た。そこでは足跡が四すじに分かれていて、少なくとも4頭いたことがわかり、びっくりしたというのである。

オオヤマネコの運動法は、きわめて特殊である。歩き方は、ほかのネコ科の動物たちよりも、ゆったりしている。ネコ科の動物の特徴であるからだの柔らかさや優美さは、もちあわせてはいないが、敏捷で耐久力があって速い。新雪の上で、ひと跳びした跡をはかると、その長さに驚くことがある。獲物をどこまでも追跡することはまれで、最初の一撃から相手が逃げてしまえば、もうそれを追いまわさず、静かに離れて、あきらめる。

殺戮を好む性格

えさとしては、さまざまな小鳥、オオライチョウやカモのような大型の鳥類と、ノウサギやアナウサギからダマジカ *Dama dama*（シカの一種）、シカなどあらゆる哺乳（ほにゅう）類を、なんでも食べる。とくにシカ科の動物が好きで、かつてはシカクイオオカミという異名を与えられていた。しかしシカよりもっと小さい獲物もきらいではなく、キツネやヤマネなどが、足もとに落ちれば、たちまち食べてしまう。

オオヤマネコは、獲物にとびかかり、ネコ



なかには方ネズミ…襲われるとって、その獲物と遊び、ときには長い間遊んでから、食べてしまう。

小さな獲物がたくさんいて、大きい獲物の少ない北ヨーロッパでは、オオヤマネコの被害はそれほど目立たない。それと反対に、温帯地方では、ニワトリやヒツジ飼いたちのオオヤマネコに対する評判は、きわめてよくない。オオヤマネコは、家畜を殺すだけで食べないことがあるので、よけい憎まれるのである。スカンジナビアでは、人間が銃をもって追いはらわないかぎり、オオヤマネコは無防備の家畜の群れに対して、襲いかかって猛威をふるう。一夜のうちに、30頭以上の雌ヒツジを殺したオオヤマネコの例が報告されている。これは明らかに、オオヤマネコが食べるためではなく、意識的に遊びとして行なった殺戮であるというほかに、説明できない話だ。

交尾期は冬であるが、その時期は緯度によって変わる。雄たちは、雌を確保しようとしてうなりながら、すさまじい戦いを展開する。およそ60日で、雌は、岩穴か、キツネの捨てていった土のなかの穴に、3、4匹の子を生む。子の重さは300グラムくらいであり、目が開くのは9、10日たってからである。いったん乳離れすると、母親は子どもたちをトガリネズミだとか小鳥で養い、狩りのしかたを教える。

オオヤマネコは、ごく幼いうちにつかまえると、容易になれるし、その生活に満足する。しかし成獣となってから捕えた場合には、気まぐれで陰気で強情である。冬のきびしい寒さにはよく耐えるが、よくかわいたすきま風の当たらない寝床がいる。上等な肉しか受けつけず、しかも肉もいろいろと変えてやらなくてはならないから、飼育には骨が折れる。

オオヤマネコは、とくに北方で、熱心に狩られている。狩りの方法はさまざまであるが、わなでとろうとしてもむだである。身軽なので、わなをよけてしまうからである。そのうえ、わなにかかっても、猛り狂っているこの動物を取り押えるのは、きわめてむずかしい。イヌを使ってとることもあるが、イヌは強健で、特別に敏捷な、すぐれたブラッドハウンドでなくてはならない。オオヤマネコは、猟犬からのがれるために、いろいろなかけひきをしたり、跳躍して足跡をごまかすからである。一般にオオヤマネコは人間を避けるが、けがをしていたり、必要にせまられた場合には、ためらいなく人間に襲いかかる。

オオヤマネコの毛皮は、かなり高値で取引きされている。肉は、白くてやわらかく、子ウシの肉にかなりよく似ていて、野獣としての悪臭は、まったくなく、珍重されている。

オオヤマネコ
目のなかで…もの…している?…
…は…の…
…な…幅…ても…ってしまう
いまは、仕事のあい間のひと休みなのだ
PH. HOLMES LEBEL



カラカル　*Lynx caracal*

カラカルは、体長65～75センチ、体高は平均40～45センチ、尾の長さは約25センチの美しい動物である。まさしく砂漠のスフィンクスで、そうした環境に完全に適合したからだの構造に恵まれている。

からだは北ヨーロッパのオオヤマネコよりほっそりしていて、走るのがとても速い。毛のふさで飾られ長くとがった耳は、その聴覚をいかにも鋭いものに思わせている。黄褐色の毛並みは、砂漠の色とまったく完全に調和している。腹部とのどだけがほとんど白色で、上くちびるには斑点か線があって、顔にアクセントをつけている。

毛の色は、この動物の生息している地域によって、多少明るさに違いがある。生まれたときには、からだに斑点がついているが、それは数か月で消えてしまう。

カラカルの分布地域は、非常に広い。アフリカ全土、トルキスタンからインドに及ぶ南アジア、小アジア、アラビアに生息している。砂漠地方が好きで、森林にははいらないようである。

ヌビア南部のスーダンの住民たちは、カラカルが単独で生活し、小型の哺乳動物や鳥類を捕えるという。またインド人たちはこの動物が、小さなレイヨウを追いかけるといっている。

カラカルは、あらゆる点からみて、ネコ科の動物のなかで飼いならすのがいちばんむずかしいものの代表である。飼いこんでも、まったく、いうことをきかない。おりに近づくだけでおこりだし、襲いかかってくる。目がらんらんと炎のように燃えてくるので、古代の人たちが、この動物のまなざしには魔力がひそんでいる、と述べているのも、よく理解できるほどである。エジプト人は、カラカルに対して、まったく特殊な愛着をいだき、この動物の姿を自分たちの記念建造物の壁にレリーフにしたり、その死骸に防腐処置をしてミイラとしてとっておくことまでしていたが、結局この動物を飼いならすことはできなかったようである。

しかし、古代のペルシア人たちは、この動物をチーターと同じように、狩猟用として調教していた。今日でもインドでは、カラカルが獲物をとるように調教されて、とくに、ウサギ、レイヨウ、キツネ、クジャク、その他さまざまな鳥類をとるのに利用されている。

ごく最近まで、インドではカラカルの競技会が開かれていた。地上にいるハトの群れにカラカルを放し、どのカラカルがいちばん多くの鳥を殺すかが、この競技の眼目になっていた。もっとも機敏なカラカルは、ハトが飛び立つまでに、12羽を殺すことができたといわれている。

体長は65～75センチで，尾の長さは25センチ… [illegible]

[illegible]



20–20

カラカル。人になつかず、飼育は困難だが
インドでは調教して狩りに使ったという
この動物が、砂漠をはやてのごとく走るとき
耳からの長い毛は、勇者の旗のように風になびいて
獲物を威圧したかもしれない。

PH OKAPIA

日本のヤマネコについて

朝日　稔

日本には、野生のネコ科動物が２種類いる。ツシマヤマネコと、イリオモテヤマネコである。

ツシマヤマネコ

Felis* (*Prionailurus*) *bengalensis manchurica

ツシマヤマネコはベンガルヤマネコ *Felis*(*Prionailurus*) *bengalensis* の亜種であり、イエネコより少し大きい。体長は70センチ、尾の長さはその半分くらいである。対馬では、大きなヤマネコは「尾をもって肩にかついだら、頭は地面に届いていた」という話があるが、ほんとうかどうか疑わしい。

毛色は、いわゆるトラネコによく似ているが、目の内側から額にかけての白いすじが美しい。

ふんを集めて生態研究

1965年夏、生きたツシマヤマネコを、はじめて島外に持ちだすことに成功してから、この動物の生態をいくぶんでも明らかにしたいものだと努力している。ところが、このヤマネコは動物園での観察記録でも、完全な夜行性であり、地元の人でも野生のままの姿を見たことがないほどの、慎重さをもつという。手がかりとしては、テレメトリー（無線発振器を動物につけ、行動を調べる方法）にでもたよらないかぎり、行動の痕跡（こんせき）を追うことが中心となる。

われわれがまず取り組んだのは、ふんの採集であり、その内容物の分析による食性の検討であった。

現在までに、対馬で拾い集めたふんはもう600個以上になる。この研究の結果確認できた食物としては、ネズミ４種、モグラ２種、ヘビ２種、カエル１種、淡水魚１種、それに昆虫は45種を確認している。それぞれについて、ふん中にふくまれる個体数を検討し、別に採集した標本も分析、測定して、ツシマヤマネコの栄養学について、立ち入ることができるようになった。

推定300頭が天然記念物に

1968年に、対馬が国際生物学事業計画（ＩＢＰ）の自然保護部門での調査地域の１つに指定され、ツシマヤマネコの研究にも、わずかだが援助がえられるようになった。この一環として、現地の対馬高校の浦田明夫教諭を中心に、対馬全島（約700平方キロ）にわたってのツシマヤマネコの現状調査が行なわれた。その結果、今まで考えられていたよりも広い地域に生き残ってはいるが、その数は約300頭にすぎないと推定された。

ツシマヤマネコは、対馬が朝鮮半島と日本本土の中間にありながらも、陸上動物相としては朝鮮に近いことを示している、非常に貴重な種類である。日本本土には確実な化石すらないという、この動物が対馬にだけいることは、日本列島が成立したときの地史にも関連する問題である。

ところが、このヤマネコは昭和のはじめまで、狩猟が認められていたらしい。それ自体たいした経済的価値があるわけではないが、野ネコとの区別がはっきりしていなかったのである。長崎県が天然記念物に指定し、保護に踏みきったのは1967年であり、国が指定したのは、なんと本年（1971年）４月のことである。

１日に7,8匹のネズミを食う

先に述べたふん内容の分析によると、ツシマヤマネコのふん１個にふくまれるネズミ類の骨は、平均して２匹分である。ふんの乾燥重量を、飼育中のツシマヤマネコによって測定し、野外で拾った

→ ＊



ツシマヤマネコ（雄）　長崎県厳原町・対馬高校で飼育中のもの　捕獲後３年（撮影　朝日 稔　1971年５月）



イリオモテヤマネコ（雄）　東京・国立科学博物館で飼育中のもの　捕獲後４年（撮影　朝日新聞出版写真部　1971年５月）

カラーページ注

〔注１〕 **アジアの野生ネコ**　分類学上 *Panthera* という属に入れられる、ライオン、トラ、ヒョウのグループをのぞいても、アジアにはかなりの種類の野生のネコ（*Felis* グループ）がいる。

解説にとりあげた新発見のイリオモテヤマネコとツシマヤマネコ（ベンガルヤマネコの一亜種）のほか、この記事に出てくるスナドリネコ、ペルシャネコの先祖ともいわれるマヌルネコ *Otocolobus manul* やインド、セイロンから中国にかけて分布するジャングルネコ *Felis chaus*、ネパールからビルマ、インドシナ、ボルネオまでの東南アジアにひろがるマーブルドキャット *Pardofelis marmorata* などの、12、13種が報告されている。アジアは、ネコ属のもっとも豊富なところである。

〔注２〕 **ネコのひとみ**　那波昭義氏によれば、ネコ科の瞳孔の収縮時の形は縦に細長くなるタイプと、丸いまま収縮するタイプの２つに分けられ、その中間形も細分すれば、さらに２つになるという。一般に大型種は丸形で、中・小型種は細長形（アーモンド形）であるが、例外としてウンピョウ *Neofelis nebulosa* は大型種だがアーモンド形、ジャガランディは小型種だが丸形である。いずれにせよネコの瞳孔は、光が強いときには収縮して、網膜にはいる光を制限することでは同じはたらきをしている。

〔注３〕 **鼻鏡**　哺乳類では一般に、鼻孔の周囲は毛がなくて裸出し、粘膜状になっていて、湿っていることが多い。この部分を鼻鏡という。

〔注４〕 **ネコにおける種間雑種**　一般に同じ属のなかでは、たとえ種が違っていても雑種ができる。とくにネコ科では多くの例が知られている。大型のネコ科であるライオンとトラのあいだでは、ライガー Liger およびタイゴン Tigon が、さらに甲子園阪神パークでは、ヒョウとライオンの雑種レオポン Leopon ができている。この例のように、父親となった種の名の前半と、母親の種の名の後半をくっつけて、雑種の名とすることが多い。

ここではヤマネコとイエネコの雑種があげられているが、これも実現性がじゅうぶんに考えられる。ただ、ツシマヤマネコでは、現在のところイエネコとの雑種は知られていない。なお、これらの種間雑種は１代限りで、子孫は生まれない。

〔注５〕 **オオヤマネコの足跡**　この動物の足跡は、下図に示すように真珠の首飾り形である。図は、上が前足、下があと足で、実物のほぼ４分の１である。



〔注６〕 **重ね足**　食肉目の動物の多くは、自分の前足の足跡の上を、あと足で踏んでいく。それだけではなく、たいていの哺乳類では、他の動物の足跡の上を踏む習性があり、雪の上ではとくにこの習性が強い。この重ね足は、新雪を踏みかためる労を省くためと考えれば、なにもオオヤマネコだけの習性ではない。実際に、日本でも積雪地のニホンザルやキタギツネに、重ね足が観察されているだけでなく、人間でも新雪地ではそのとおりの行動をする。

《止め足》といわれる習性は、オオヤマネコやキツネに見られるもので、歩いたあとの足跡を踏んで逆行し、途中で横にとんで方向を隠すものである。これは明らかに、足跡を追われるのをのがれる意味をもっている。

〔注７〕 **ブラッドハウンド**　11世紀に、征服王ウィリアムによりイギリスにもたらされた、北方系の猟犬。肩高70ないし80センチの大型犬で、赤か黒の毛色のものが多い。首が太く、肩の張ったタイプで、耳はロープ状に大きくたれ下がる。本来はシカ狩りに使われたが、現在ではそのすぐれた嗅覚を利用して、警察犬として飼育されている。追跡犬としては最高の資質をもち、特徴のあるにおいなら、４日後でも追跡できるという。■

（朝日　稔）

ヒグマと2人のイノシシ 19

子グマの外科手術

畑　正憲



ひざに抱かれて，霧多布への旅をするどんべえ

がんぜない，しかし大切などんべえを抱えて，400キロの旅をどうするか，思っただけで頭が痛かった。ライトバンに換えたといっても，車内は狭い。大暴れされたら手に負えないだろう。運転する弟に後ろからとびかかったら事故の原因にもなろう。とつおいつ考えたが，いい案がない。僕は例によって，ええいままよとばかり，細い鎖につないだだけで，どんべえを車に乗せた。

「さあ，出発だ」

自動車が動きだした途端，どんべえは吠え始めた。窓わくにすがりついて，声を限りに叫ぶ。

「構わぬから先を急いでくれ」

僕は運転席の弟にそう頼んだ。

ところが，どうだ。層雲峡を越える辺りで，どんべえは急におとなしくなって僕の膝の上で眠り始めた。体重は6キロ強。長く座っていると足がしびれたが，切なげなわめき声を上げられるよりはましである。僕は400キロの旅の間どんべえを抱きずくめで先を急がせた。

どんべえを引き取ってもうかなりになるが，彼女が娘らしく見えたのは，この旅の途中位であった。しかし，それは嬉しい誤算だった。もし大暴れしたりしたら，手こずって，途方にくれたことだろう。

霧多布に用意しておいたサンルームでのどんべえは，さながら黒い戦車，鋼鉄のかたまりであった。長い旅行が彼女を神経質にさせ，近寄ると骨も折れよとばかり咬みついてきた。

初めてクマの子を見る娘は，両足を揃えて壁に密着して，

「怖くはないわ。でも，心臓が口からとびだしそう」

と言って，無理に微笑を浮かべた。

ブラック・デビル（黒い悪魔）。

僕はそう呼んだが，妻はフホローショだと言う。静かならざるドンだから，ショーロホフを逆にしてしまったのだ。

弟と僕の手には，また傷が増えた。手ばかりではない。すねにも，内ももにも，背にも血がにじんだ。

僕が訊く。

「大丈夫か。無理するなよ」

「なんのこれしき。写真を撮る余裕がないのが残念なだけだ」

弟と僕は睡眠をとらなかった。それは少しも構わないのだが，困るのは来客の処理であった。

見たいのはわからぬではない。どんな状態であるか写真に収めたい気持もよくわかる。僕自身が記録映画の経験があるので，1枚だけ，ワンカットだけ，という要求は痛いほどわかる。

がしかし，急に来客があると折角落ち着き始めた子グマがナーバスになり，それだけ僕の傷が増えた。これは特殊な実験である。僕は，今この原稿を立ったまま書いているように，生きている限り報告を書き続けるつもりだ。だから，どうかそっとして置いていただきたい。うまくいったら必ず公開して，ピエロにでも何にでもなって，顔をさらすつもりだ。それまで待って欲しい。どうか僕を殺さないで下さい。

サンルームでの最初の日，午前2時，どんべえは夜泣きを始めた。

例によって，リズムをつけて，

——ウワッ，ウワッ……。

＊

ふんの量と比較すると，この数が1日分の食物量からのものだということがわかった。

ところで，同じように飼育実験によって検討すると，ふん中に発見できるネズミの数は，与えたネズミの数の3分の1から4分の1にすぎないという結果がえられた。

そうすると，ツシマヤマネコは1日に6匹から8匹のネズミをとっていることになり，年間では2000匹のネズミを退治していることになる。全島に300頭のヤマネコがいれば，それだけで年間60万匹のネズミがえじきとなっていることになるではないか。

対馬は上下2島に分かれている。300頭が，かりに両方の島に等分されているとすると，遺伝的に交配できるのは150頭のあいだだけとなる。この数字は，遺伝学者のいう，近親交配を避けるための最低必要数であって，150頭以下の集団では，やがて滅亡へ導かれるような，遺伝的素質があらわれる危険が大きいといわれる。ツシマヤマネコの保護は，今をおいては時期を失するであろう。

イリオモテヤマネコ
Felis* (*Mayailurus*) *iriomotensis

イリオモテヤマネコは，ツシマヤマネコ以上に貴重な種類である。

生息地の西表島は，沖縄諸島の西端にあり，東西約30キロ，南北約20キロの小さい島であるが，大部分が原始林でおおわれている。1965年に戸川幸夫氏がこの島にヤマネコがいることを報告されたときは，ベンガルヤマネコの新しい産地ぐらいに考えられた。というのは，すぐ近くの台湾には，石虎という名まえで知られる，ベンガルヤマネコがいるからである。

新発見の珍獣

ところがその後，くわしい研究が進むにつれて，ベンガルヤマネコとはかなり違っていて，非常に原始的な特徴を多くもっている，まったく新発見の動物であることが明らかとなった。いちばん似ているのは，遠く離れた南アメリカのネコ科，たとえばジャガランディであるといわれる。歯の数は哺乳類の分類上で重要視される特徴の1つであるが，それをみても，他のヤマネコ類ではすべて，上あごの小臼歯が3本であるのに対して，イリオモテヤマネコは2本しかない。

大きさや毛色はベンガルヤマネコによく似ている。その生態や現在の生息数については，今のところはほとんど何も知られていない。1月，2月に採集されたふんにはコウモリの毛が，鳥の羽毛に混じって確認されている。

伐採計画による危機

西表島の原始林は民有林が多く，すでに伐採の計画があると聞いている。なぞに包まれたこのヤマネコが，今日までその姿を隠して生き残ってこられたのは，深い森林のなかに生活していたからであることはまちがいない。森林が伐採されたなら，どのような手段をつくそうとも，イリオモテヤマネコは滅亡するであろう。その後にはネズミが，天敵をほろぼしてくれた人間に感謝の声をあげて，繁殖するのではないかと思われる。■

とわめき，部屋中を歩きまわるのである。イヌならば，ミルクをやるか，抱いてやればことが済む。寝床に入れてやれば，たちまちゴキゲンになるものだ。

ところが，クマの場合には，すべての努力が無駄であった。ハナから人間など問題にしていないし，絶対に食いものではごまかされなかった。ぜんまいを巻くと，ゲーコ，ゲーコとないて走り回るアヒルの玩具があるが，まるでその通りであった。内なる強い衝動にせかされて，どんべえはぜんまい仕掛けの人形そっくりになった。

無駄だとはわかっていても，どうにかしたい。僕は後ろからどんべえを抱いて，子守歌を口ずさんだ。

いい子だ，いい子だ
ねんねしな
どんべえはいい子だ
ねんねしな

暗い部屋の中で，独り苦笑をもらした。まだ肉体的に青年であった頃，となりの部屋にいる婦人が，赤ん坊を抱いてしじゅう独り言をいっていたのを笑ったものだった。あんな人生なんて，くそ面白くもないと莫迦にした。が，この歳になって，僕はその主婦と同じ状態に追いこまれている。骨が太いどんべえを左右にゆすりながら，僕はこれが生きるということであり，育てるということではなかろうかと考えたりしていた。

翌朝，上川から電話があった。間見谷さんの家でも，3頭の子グマが，やはり同じ状態だったという。

「夜明けに泣かれて，みいんな寝不足でくらくらよ」

奥さんの電話の声は若々しい。

夜中か，夜明けにだけ始まるのだったら，あるいは解決案が発見できなかったかもしれない。ところが，その異常な行動は，昼間でも出現した。

上川でもそうだった。突如得体の知れぬ魔ものがとりつくのだ。

どんべえは，約1時間の周期で，眠ったり起きたりする。目醒めている時にはカステラを入れたミルクを飲み，あちこちに便や尿をまきちらす。

排便には，まだ外部からの刺激が必要であるようだった。遊びが好きで，高い所に登り，ドスンと尻からとびおりる。その際に便意をもよおし，高くしてある蒲団の周辺，窓わくの周辺に排泄物が集中した。

むろん，きげんのいい時には，手でこすってやってもいい。生殖器を指の腹でもんでやると，黄色味を帯びた液体がふきだしてきた。

生殖器といえば，上川で判定して貰ったものの，本当にどんべえがメスであるかどうか，僕は確信が持てなかった。上川での判定方法は，生殖器の位置である。筒が腹の中央部にあるのがオス，肛門の近くにあるのがメスだと教えられた。その位置だと，交尾の際便利だとの説明も聞いた。

が，筒であるのは変わりがない。オスもメスも生殖器が筒状になっていて，長めの毛が生え，先端で筆状になっている。

僕は妻に相談した。

「どうだろう，どんべえは本当にメスだろうか」

「メスだろうかって，あきれた。それもわかっていないのですか」

「メスだとは思うけど，はっきりしないのだよ。だれかに訊いてみるか」

それは，指でもんでいるうちに解決した。筒だと見えてはいたが，肛門に近い方が割れていたのである。どんべえは，正真正銘の娘だった。

徹夜が続くと，注意力が散慢になり，ついうとうとしてしまう。危険物は部屋から取り除いてあるつもりだったが，ふとしたはずみで，どんべえが足の爪を1本折ってしまった。

細いようだが，動脈を切ったらしい。鮮血があふれ出してきて，蒲団や床に花びらをまきちらしたようだった。治療しようにも，つかまえると全身をバネにして抵抗する。

「どんべえ，静かに！」

「血をとめるのだから，じっとして，そら足を出せ」



新しい家でも，畑さんの傷はふえるばかりだ

言葉が通ずる相手ではない。余計たけだけしくなって，うなり声を上げたかと思うと，折れた爪を自分で食いちぎってしまった。

僕は蒼くなった。こうなったら，否応なしに首筋をとらえて，止血しなければならぬ。

そう決心してどんべえを追うと，不思議にも，出血はピタリと止まっていた。だれに教わったわけでもないが，山の王者は，稚くして外科手術さえできるのである。僕は，尿と便と血まみれになったパジャマを着たまま，明るくなっていく空をみつめていた。■

古典動物園　その3

清少納言と犬

池田弥三郎

仲が悪い例としては，「犬猿の仲」というけれども，犬と猫もしょっちゅう対照的にされて，それが反映してか，犬と猫も仲がわるいことになっている。

紫式部の源氏物語からは，猫の話をひくつもりだが，まず対照的に，犬の話を，清少納言の『枕草子』からあげておこう。話の続きは大へん都合よく，犬から猫へ移っていくと思う。

清少納言の仕えた皇后定子の背の君は，一条天皇だが，天皇は猫がお好きで，清涼殿で猫を飼っておられ，殿上人ならぬ殿上猫だというわけで，五位の位を与えられ，「命婦のおもと」と名付けられていた。五位の位をいただいた，れっきとした女官が命婦だが，多分この猫は，雌の猫だったのだろう。「命婦さん」と言われていたのだ。そしてこの猫には，人間の「馬の命婦」と呼ばれた乳母がついていた。

ある日「命婦のおもと」は，端近いところにでて，日なたぼっこをしながら，香箱をつくって（猫が寝ている様子），とろとろとしていた。五位の「女性」ともなれば，たとえ猫だって，そんな端近くへでていってはいけないのである。乳母の「馬の命婦」が驚いて呼んだけれども，猫はねむそうな目を心持ち向けただけで，動こうともしない。怒った乳母は，犬を呼んだ。「おきな丸。おいで。命婦のおもとに食いつけ」と言ったから，相手は犬だ，見境がない。いきなり猫にとびかかった。猫はびっくりして，御簾の中へとびこんだ。

天皇は，おびえた猫をふところにお入れになって，「おきな丸をこらしめて，島流しにしてしまえ」とおっしゃった。乳母の馬の命婦も解任，謹慎ということになった。

さてこの犬のおきな丸は，さんざんにこらしめられて，追い立てられたが，3,4日すると，戻って来た。それをまたつかまえて，打ち殺さんばかりにして，門の外へ捨ててしまった。ところが，ひどく腫れ上がって，おきな丸とも見えない姿になって，また戻って来た。しかしその犬が，清少納言の思いやりのあることばを聞いて，ふるえながら，涙を落としている。そんなことから，自然に御勘気も許された，という話。

おきな丸がふるえながら涙を落とした様子は，その後も，清少納言のサロンの好話題となって，いつまでも，女房たちの笑いや涙のたねとなった。

清少納言の筆は，終始，おきな丸に対して同情的で，五位の位をいただいている猫に対して，多少，批判的であるのがおもしろい。そして，追われても捨てられても戻って来て，見違えられても立ち去らずに，とうとうまたもとのさやに納まってしまうまでの筆の運びは，なかなか得難い一文になっている。

古典への犬の登場は，猫よりも早く，それはすでに，神々の物語の中にもでて来るが，すべて，猫と対照的なのが興味をひく。じっと寝ている猫に対して，犬が「往ぬ」なのか「居ぬ」なのか，それは知らない。■

海中動物の生活

写真と文　**館石　昭**

4　きびしい生存競争

刀のようなヘラヤガラ　　水深4メートル　沖縄にて



人間社会では，なんとかしてやりたくても，自分の手ではどうにもならない，という場面にぶつかることが多いが，水中でも，よく見かける自然のきびしい掟がある。24時間，生き残るための争いが続けられており，弱いものはつねに戦々恐々として，かたときも〝魚心〟の休まることがない。

オーストラリアのヘロン島の海中では，5センチほどの小魚の大群が，いつも1メートルもある魚にねらわれているが，数万匹の小魚の大群にできることは，群れの形をいつも変化させていることしかない。丸いかたまりになったかと思うと，次の瞬間には，細長く水面から海底まで糸のようになったりする。前衛的なリズムをもった動きは，はた目にはたいへん美しいが，かれらにとっては命がけなのだ。

大きな魚は，群れの周囲を回りながら，チャンスを捕えてまっしぐらに突進する。5分に1回ぐらいアタックし，3回に1匹は捕えている。この計算だと，1時間で4匹，1日10時間の労働で40匹だ。これでは，満腹するかどうかわからないが，それでもねらわれる小魚はやりきれない。太陽がのぼり朝がくると，命がけの群れの運動が始まり，夕日とともにやっと生き残って，夜だけが安らぎの時間なのだ。

沖縄の石垣島沖でのこと，サンゴ礁に群れるデバスズメのあいだを，ゆっくりと泳ぐヘラヤガラを見つけた。小さなとがった口には，とてもはいりそうもないデバスズメにねらいをつけて，突進を開始。その速いことは驚くばかりだった。ところが一方，ねらわれた相手は，かなりゆっくりと10センチほど移動する。矢のような形で突っこんだヘラヤガラは惜しくもから振り。速く泳ぐときはからだが突っぱっての直進だから，的をちょっとはずされるとどうしようもなく，はるか先方で大きくUターンをして，またやり直しということになる。

水槽に飼育されている熱帯魚は，時間がくるとえさをもらえるが，自然の海中で食うことの苦労は，人間生活以上のものがあるようだ。■　　（水中写真家）

仲間のひろば

赤トラネコの思い出

戦災で焼失した家の北西の物置き近くに，おキツネさまならぬおネコさまの像が祭られていた。像は墓石作りの石工の手に成ったもので，古代エジプトのネコ像のように，前足をそろえたところはよいが，どことなく品のない，もの悲しい表情をしていた。なんでも，祖母が病気になったのは，ネコをたいせつにしなかった祟りとかで，祈禱師のことばを信じて，曽祖母が祭ったものである。

毎朝，その像に魚と水を供えるのが，小学生のころのわたしの日課だった。供物をして，縁側にあがるわたしを横目で見て，赤トラの野良ネコが，飛鳥のように供えた魚をかすめていくのも，またお定まりのことだった。ときには，そのネコを追っていくネコもいて，朝からけんかの花が咲くこともしばしばだった。

ある朝，物置きで子ネコの声がするのでのぞいて見ると，ボロ布をじょうずに巣のようにした中に，小さなネコが3匹，からだを寄せ合っていた。そのかわいらしさに思わず手を出すと，薄暗がりのなかにりんのような光がして，わたしの手は無残にひっかかれていた。息をのむ間に，目の前を，毎朝魚を取っていくあの赤トラのネコが，疾風のように走り抜けていくのだった。

子ネコのかわいさに，飼ってやりたいと思ったが，やはり野良ネコの血は争えず，どうしてもなれない。母親はわたしのそばまでくるようになったが，チビはえさを食べると，さっさといってしまう。子に食べさせてからやっと自分が食べる母親の情景に，ひっかかれた傷の痛みも忘れて心なごむのだった。家の前の草原で親子が遊ぶ姿を見ながら，母親というものの賢さ，哀れさを，子ども心にも思ったものである。

ネコの魅力は野良ネコにさえある――そんな気持から，いつしかわが家も10数匹のネコ家族とあいなった。■

（沼津市・渡辺てる子・44歳・画塾）

ペット相談室



担当
高橋達志郎
（小鳥の病院院長）

〈問〉　ジュウシマツの雄と雌は，どこで見分けるのですか。

（東京・木原大樹・10歳・小学生）

〈答〉　ジュウシマツは，孵化後3か月で一人まえになりますが，雌雄のわかるのは2か月以上たってからです。

1羽ずつを別のかごに入れ，おたがいに呼びかわす声を聞き，ピーッ・ピーッと鋭く鳴くのは雄で，ジュリジュリ・ジュリジュリとにごった声を出すほうは雌です。

一人まえになった雄は，止まり木の上などで，からだをふくらませ首を伸ばして，ジュクジュク・ピーピーとさえずりますが，雌はそのようなさえずりをしません。■

〈問〉　小鳥の体温は，何度ぐらいあるのですか。

（千葉県・藤平八郎・15歳・学生）

〈答〉　小鳥も人間と同じように，体温は朝に低く，夕方に高い傾向がみられます。また，抱卵中の雌の体温も高くなりますが，平均40°～42°Cです。■

〈問〉　傷ついた鳥，巣から落ちているひなを拾ったときにとる処置について教えてください。

（東京都・新井恒子・18歳・学生）

〈答〉　わたしたちは，よくこのような鳥を見つけることがありますが，まず第1に，ぬれているときには，ドライヤーなどで直ちにかわかし，からだをあたためてやります。

体温がもどったならば，次にえさを入れてやる必要があります。えさは野鳥の場合，ほとんど小鳥屋で売っている五分餌という摺餌でよいのですが，まにあわない場合には，食パンとゆで卵の卵黄を半々に湯を足して，アンコより少しゆるめにといたものを，はじめは口をあけて，少しずつ入れてやります。

このえさは，親鳥でもひな鳥でもかまいませんが，弱っているときには，のどづまりさせないように，少しずつ入れてやる必要があります。

外傷があり，羽毛と血がくっついて固まっているときには，なるべくそのままにして，再出血を防ぎます。

脚（あし）や翼を骨折している場合には，テープや副木を使って固定しなければなりませんが，傷口にやたらに軟膏をつけてはいけません。親鳥などが少し元気になってくると，かごの中であばれて体力を消耗したり，かえってけがをしたりするので，かごには何かおおいをして，薄暗くし，おちつかせる必要があります。

傷がなおり元気をとりもどしたら，再び野に放してやるとよいでしょう。■

裏表紙説明

ヤギ　ヤギは古くから家畜化され，人間とは長いつきあいである。

道ばたの草を食べさせていれば，別に飼料を与えなくとも乳を出すし，肉も食べられる。また，その皮は，くつや手袋の材料として使われ，遊牧民の水を入れる器としてもちょうほうがられている。

経費のかからぬ経済的な家畜として，世界のあらゆる場所で飼われているが，どちらかといえば，ヤギは山岳地帯や草原で飼うのに適している。岩山を恐れげもなく登っていき，岩のあいだにはえる草を食べ，少量の水で生きていけるからである。

牧場の柵の上から仲良く首を出しているこの2頭のヤギは，ともに雌である。よく，老人のひげの形容に使われるヤギひげは雌にも見られ，ヒツジと識別する際の目じるしにもなっている。牧場の豊かな日光と草とが，かれらの健康を保証しているようだ。■

Ph. Normann-Fotogram



中国西周時代
高さ　35.7センチ
泉屋博古館蔵

乳虎卣

卣は酒を貯える器のことである。このように，虎が人間を抱いているようなかたちのいくつかの卣があって，乳虎卣と呼ばれている。中国の古い伝説の，楚の首相子文が，不義の子であったために捨てられたところ，虎が乳を吞ませて育てた，という話に結びつけた呼称である。しかし，この銅器は，子文が存在した前7世紀よりも古い西周時代の作で，虎は大きな口を開いて抱えた人間にかみつこうとしているのである。人間はまげを結っていないから，死者の亡霊をあらわしたと考えられ，その亡霊に虎が食いつく姿に，魔除の意味を持たせたものであろう。銅器は，祭儀の什器や陵墓の副葬品として作られた器であって，すべて特異なかたちをし怪奇な文様が施された。前15世紀頃から作り始められている，中国古代工芸の驚くべき技術と，すぐれた造型力の産物である。この卣もそのなかの逸品に数えられよう。虎はもとより抽象化された姿で，足と尾を支えとして，みごとな容器を形づくっている。全身にびっしりと刻まれた饕餮という怪獣や龍の文様の，きびしく力強い美しさもみものである。虎の後頭部に口があって，鹿をのせた蓋がつき，提手の付根は牛の首をかたどっている。これらの銅器は，専門にそれのみを作ることを強制された奴隷の製品だが，圧倒的な造型性は後代及ぶものがないといってもよかろう。■　（水尾比呂志）

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻20号　昭和46年7月25日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ヤ　ギ　　説明 30ページ

雑誌コード　0634